

扶桑皇統記圖會  
前編  
四

遠  
2505  
13-4



遠  
2505  
13-4

扶桑皇統記圖會前編卷之四目錄

鑄大佛銅像

良辨僧正之傳

良辨僧正切ととき大鷲小櫻の圖

近易石山寺建立 從奧易始獻黃金條

石山小良辨釣とる翁の圖

聖武天皇崩御 惠美押勝誇君罷事

押勝君罷小誇と百官有司と護の圖

皇統記圖會前編卷之四目錄

感夢想太后儲浴室

改鑄新錢條

弓削道鏡朝恩と蒙りと禮讓の廢と圖

惠美押勝滅亡の事

弓削道鏡乱宮中

神靈路上救急難忠臣夏

新帝淡路於謫所崩

道鏡の内命と受清磨を害せんとして暴小天雷發る圖

光仁天皇御即位

道鏡於配所餓死條

目錄終

扶桑皇統記圖會前編卷之四

浪華 好華堂野亭參考

鑄大佛銅像

良辨僧正之傳

聖武天皇深く三宮小飯依の己小諸國小國分寺と建り其餘寺院  
伽藍を多く御建立ありける。猶又盧舍那佛の銅像を造りて  
これをも是ハ莫大の國財を費すと義を如何有んや。御飯依僧良辨  
僧正此義を伺ひける。良辨謹んで勅各やされける。これ佛像を造り  
てハ其功德廣大无边して四海太平の御祈り。何変り是ハ勝りし君  
費財を厭ひむ。普く天下の人民ハ一紙半錢の寄附を勸めり。如  
是あれを多く聚り佛像速く成就し。佛像供養ハ一人の御力より  
他力の信絶こそ。如來の御本願ハ叶ひ。勸めりし。御后光明皇后

よしも。もも御勸ち有るも。帝逐小睿慮を定り。人行基僧正と以て  
諸國を勸進させり。其勸進帖の文は曰

朕薄徳と以て恭しく大位と承志し兼濟を存し。勤めて人物と  
撫率土の濱已小仁恕小霽活すと以ても。而も普天の下いも法恩  
を給つを。誠小三宝の靈威小頼て乾坤相奉小万代の福業と修  
成く采人事と欲と。奥小菩薩の大願と發して。盧舍那佛金  
銅の像一軀を造り奉り。利益を蒙り冥福を祈んと欲と。此事  
小依て敢て百姓を侵し擾さむ。強て聚斂せしむる。更勿き遠  
近小朕が意せ公告知り。一針一草の衆力を以て伽羅佛像を  
造立し。万民と共に佛果と受奉る者也。

大僧正行基右の勸進文を捧げて。諸國の國司守護人より下市農夫

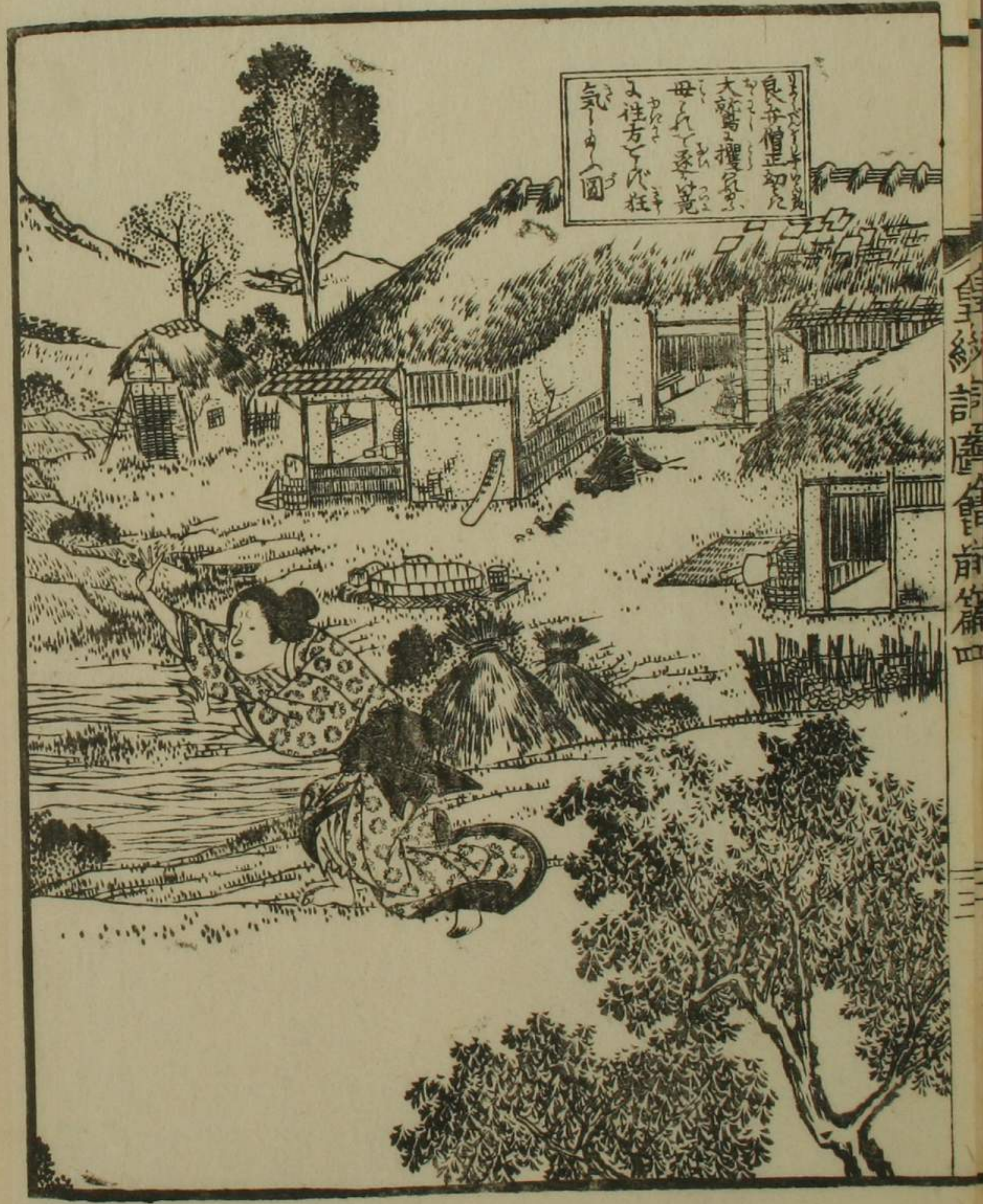
小いさるや。普く勸進せられたまむ。我れくと小應じて絶入りたる  
程小。莫大の財宝聚りたる。帝斜めと歡喜し。御庫小積所乃  
金銀を合して大佛の銅像と鑄し。伽羅を江州甲賀郡小建立させ  
せのひたり。是行基僧正の勸進の力小依とまらりと以ても。一ツ良弁僧正  
の帝小他力信施の功德を勸ちまらむ。功小依り。抑良弁僧正と。江州  
志賀郡の農民の子なり。又八當才の比死後母の手小て育られたる小。二才乃  
く其母我兒を懷れて外面へ出来の葉と摘たるが子と抱へて。自由あり  
きり。稚子と草上小ちり。置己が隨意小這遊む。其身ハ葉の葉と摘  
とりて在る小。忽比良が山嶽の方より。年歴大鷲一羽飛きて。真一文宇  
小舞下り。草の上を這回り。花を摘ちて余念なく遊び居る。稚子とほと批  
攬ひて雲井遙小飛去る。母鷲の羽音小残れり。顧れむ。早我兒と批

遙々の天を翔り往ふ。何久以て致鳥なる。あやと叫び我をすして  
田とも畦とも言ど追行るも何ぞ其経あるや。早速鳥の姿も見え成  
れむ。あつと叫びて泣けり。又起つて其方乃天をおめ北に去りて魂を人  
乃とく。是より心乱きて發狂たり。我屋へ申す。我子返せ。子返せ  
と叫び泣き其所もあつと憧れ行る。衣れたり。然る小平城乃東大  
寺小義淵僧正とて道徳勝ま。聖僧あり。心願の更あり。日く春日  
明神へ参詣せられ。小或日倒の。明神へ参詣せん。徒弟若堂あは  
を後へ社参あり。帰路小春日野を通れ。年徑一杉の樹の梢小兒  
の啼声あえたる。僧正訝りて立停り。杉樹の梢を見上れば。一羽の大鷲  
梢の枝小留り。人の小兒を抱いて。兒を食んと。此角とよせて。列する。寄  
てハ。此角と引て在る。僧正小兒が就鳥小食入。更と憐れ。梢小向ハ印を

結びて真言と唱られ。就鳥ハ是小恐き。人兒を捨置て。飛去る。僧正  
と肩小掛する。錦の九条袈裟衣とて。徒弟們小四隅を持せて。廣げ愛させ。諸  
再び梢小向ハ真言と唱。祈念せられ。忽ち小兒ハ梢をたれて。袈裟乃  
上へ落下り。音をたて呼くと啼き。僧正立寄て見らる。小。二支鉾の玉乃如。男  
子たり。自ら小兒を抱え揚らる。小即時小啼止。僧正の息を見て。完示  
くと微笑する。僧正哀憐の心。弥増。何圓の維が子。小。知れども。就鳥小抱  
と攫ま。其又母か。悲と尋。搜さる。圓所を尋ひ。返り得。手  
る。小。圓所を書物。物なり。肌小掛。守。囊小。一寸八歩の觀音の木像有。れ  
む。僧正初て心付。彼惡鳥。此小兒を食んと。此角を寄。れども。敢て食ひ。得。じ。ハ  
此佛像有。ゆ。今。始。觀音。菩薩。の。利益。を。尊。を。



皇統記圖繪前篇四



良女僧正初尼  
大鷲攫取  
母を逐て竟  
又住方を狂  
氣中人圖

皇統記圖繪前篇四

とて押さへた。又守裏小収とて小児の肌小掛。何國の者の子とも知れぬ。唯小返さ  
 ん中もな。院の御所小乳汁のある女房有るを。それ預けて育せしむるが  
 つれい。月日小閑守なり。春過秋暮て小兒小早乳離れ。年小かりぬ。寺へ  
 呼とて艱育せしむる。それ尋る者もふたれぬ。七女の頃より徒弟とて  
 名を良弁と呼て。手跡素績をせらる。才機勝進。記憶強。自余の小僧  
 よう遙小優りたる也。義淵僧正も所生の如く愛して。經綸を教らる。一度更  
 とる字。再び志る。更なり。一を聞て十を知の俊才なりぬ。僧正も感嘆せり。々  
 更度くあり。斯て良弁十才なりぬ。師の坊良弁を膝下招れ。結れ  
 々る。六才の二才の頃。詔鳥小扱れ。春日野の杉梢小在る。我助けて艱  
 育せり。然とも何國の維子とも。父母の名も國所もあれぬ。是より緒人小其更と  
 結り。詔鳥小子と攫まると。人あむ。我寺尋の来るべ死す。生てすと

頼りわれ。今以て尋の来る者も。いれぬ。你が父母の生死定むる。是より前  
 生の宿業小因と。それあれ。你が守裏の觀音の尊像を。父母の記念と。思ひ堅  
 固小佛道成修行。父母の二世安樂と祈り。且一切衆生を。化度と。程の僧と  
 あれ。それ懇ろ小鏡示されぬ。良弁ハ推心小師の坊の高恩を感。又々父母の  
 更と思ひて。涙を流し。仰の。即ち。就鳥の甜食と成。此身成。御助け。下さ  
 り。上此年。来御艱育中。給り。御高恩。この世。報。下さ。り。此六  
 師匠。とも。父母も。崇め仕。下。是より。益。志。し。し。属。小。腹。食。と。忘れ  
 て。經綸。小。眼。と。睨。切。磋。琢。磨。の。功。を。積。む。程。小。年。の。長。と。小。應。心。と。字。業  
 追。進。緒。經。の。奥。旨。究。む。と。久。限。も。な。く。若。年。お。平。城。寺。大。寺。の。僧。中。や。て。そ  
 良。弁。小。勝。る。博。識。なり。と。賞。美。せ。ら。る。小。發。達。緒。人。の。用。小。重。く。殊。更。布。田  
 那。小。勝。る。む。ろ。の。能。弁。かり。不。禁。裡。院。中。棋。家。あ。と。す。の。良。弁。と。緒。相。有

て鏡法させ御聽聞ありたり。斯て良弁三十才あられし年師の房義淵僧  
 正遷化せられり。其終焉の前良弁を托辺小招れられり。我は余終  
 の期未まり。你ハ學道成就と我跡を踐小足り。念佛道修行小心と屬し  
 万代まで名を残と知織と成よと。數くの遺物を与られられ。良弁頂戴と  
 涙を流し。拙僧ハ幼稚の時小悪鳥の餌とあふり。師の御情にて危れ一命と  
 助く。それより以來御養育小預り。鴻恩ふり。命てハ須彌山も尚低く  
 滄溟海も猶浅く。父と母と頼もまじり。師ハ万命の御恩を報し。もす  
 別まなわつと。度の悲しきま。海泣の涙小衣の袖を浸し。歎れられ。義淵  
 僧正是を諫め。會者定離の金言維久免る。今別り。も終小。西方無  
 為の都にて永く交り成結ん。乃と。其より一言も發せられ。瑞座結印し  
 て。千牛陀羅尼を唱へ。遂小。其夜の曉小眠る。が。遷化せられ。良弁を

ちめ妻くの弟子僧哀涙小衣の袖を後り。が。葬送の管と嚴ふり。茶  
 毗乃煙とどかり。ふ。それより良弁ハ師の坊の跡と継。聖武天皇の御祈乃師と  
 仰ぐ。僧正の官小任せられ。天子より。下万民を小尊ま。身とおれり。却鏡  
 良弁僧正の母子と就鳥ふ。れ。我狂と。現心も。我子返せ兒を  
 戻せと。呼り。歩行た。身ハ非人と零落て。冬ハ寒夜の雪小凍。夏ハ三伏の暑小  
 蒸ま。が。日本の中の高山難所を母捜さぬ。腹も。己ハ三十年の春秋と夢  
 現も。た。過。迷ハ。回。山背國淀の。来り。多。忽。と。夢の覚る  
 狂氣治す。正氣付て。不斗心小思ひ。我身就鳥小子と取。より。我ハ  
 我身何國を。往。更。就鳥小取。我子の生て現世小在。を  
 ち。我。此。此。月。尋。の。迷。思。借。も。れ。幾。幸。を。往。入。迎  
 身を顧。海州の。破衣を纏。水鏡小。字。と面。を。れ。頭。の。髪。も。雪



の色と変りて脱減面皴の波をたゞも齒ゆりう抜落て向齒のこころ  
 残り我もろ我もあゝぬ面貌あれど一向と悩むにがせむ古郷のあはじ  
 く渡子小舟の頼る船の便をこゝの船の隅小蹲りて居る小乗合の  
 衆人の談話もろ成中東大寺の良弁僧正と當世稀ある大徳や在  
 たるお彼僧正と二才の時鷺小摺りて春日山の杉の梢に在り人とうや緘  
 小天より天降りし聖人と習をしれ帝の御祈の師と仰がれ院の御所  
 撰家方も尊敬あつて平城七太寺の中の碩学と称せられぬとあへて結  
 合する小と老女はくぐと想する諸も世上は似る更も有るものよ我子  
 二才のと鷺小取まらるる其僧正が鷺小まらるる我見おてはあはれと疑  
 ひ猶も稽く尋問なやとや内船ハ早岸小着て己か隨意立別れ行去  
 るるの老女ハ本意なり思ひあがら此上ハ東大寺へ往て余所みづ僧正の

未歴正を尋問んと志賀も帰らんと其より平城行東大寺へ到りて入る小門  
 堀巍くくして玄關ハ此糸の幕とら翠簾をうけ五七人の武士嚴重小  
 並居られ申寄附をうけあはれど如何もと良弁僧正の脚負をせと  
 一月見すわく平城の町家おて食と日東大寺の辺へく窺ひる小弟  
 三日も良弁僧正乘輿小駕從者大勢小前後を守せて東大寺へ出られ  
 るる小乘輿の戸開て有るもの老女違小所を隔られ僧正の横負をん小  
 何と申稚小覚あるや小思ふも駭と我兒とも知がら身ハ非人と零落  
 更あれど釘をうけん申もあ如何せんと思ふも小乘輿と早春日の社乃方へ  
 行過る老女大い望と失ひ沈然とて其後と見送りて在る小折りも東  
 大寺の寺中より入の僧出来りたれ是幸いと立寄て詞をうけ此般小見苦  
 しれ女あてやゆと悼り多くまらるる脚出家とんけ脚尋や更のい

却度届ぬくも生く世く御恩と志まひすと世も哀れけふ言々も小僧心の  
 中も是合カおれとあんと八思とも流石佛徒の憐れ深くも留り我も尋  
 と八何更うまてされど此所八御門前と人の往及も去げ尋る更あふ我房  
 て歩む我も從て来まよと自余の寺へ歸り老女と白砂へ呼入て借尋向  
 と如何ある義と問小老女答て之此身八志賀の里小住者あては先  
 年二才小成り男子と就鳥小取まよと狂氣して凡三十年許緒國を尋る途  
 ひひひ先頃定の渡りて不斗狂氣さて正氣つれひひ古郷の志賀へ歸  
 らんと渡舟小便をきて乗ひひ小乗合の人の物語小東大寺の良弁僧正  
 二才のと就鳥小撮され杉の梢より落ゆひ御身かりとやされいをさゆ妻が  
 見小ても御在中んと思ひ其ま此手城まきう毎日東大寺の御門前へ徘徊  
 一と今日僧正の御貞をよとあが拜い何とや取ま我兒の稚貞小

似る所有中不覚いも御覽のぞく見苦く零落り此身おれも更向もん  
 りも叶も思ひ煩ひひ何年御僧の御情を以て此條の更と僧正言上て  
 給るまよたやと眞実刻あつる涙ととも頼るも小彼僧も強た実も  
 僧正の御身も你的物語と彷彿と然も世上似る更あとも言が  
 你的其風鉢ふれを我口より言上るも憚るあつるをて你的口より直小言上  
 る更猶以て叶も依て我の方便を教はるを僧正頃日御祈願  
 あつる公の御用あれ日必を春日明神へ御参詣せし下向六二月堂の前  
 なる年徑る杉樹の下へ乗輿を下り杉樹に向ひ十念と唱も右の杉  
 の樹へ僧正往昔就鳥小取まよひ一砌り稍小通りも一樹あり人号けて  
 良弁杉と稱せり拙僧你が就鳥小兒を取ま三十年間緒國を尋る間  
 次第を書記て遺はる間との書と彼良弁杉小貼むれ其辺小忍

居て窺ひひ(む)必(かな)定(ま)僧(そう)正(せい)の御(ご)目(め)小(こ)と(と)る(と)你(お)を召(め)きて巨(こ)細(こ)を御(ご)尋(たず)め(め)る(め)る  
其(その)時(とき)詳(こま)ふ右(みぎ)の次(つぎ)弟(あに)と(と)言(い)上(あ)げ(げ)よ(よ)と(と)即(す)時(とき)小(こ)老(らう)女(にょ)が緒(いと)り(り)お(お)も(も)む(む)れ(れ)を(を)仮(かり)名(な)  
交(ま)り(り)小(こ)書(しよ)記(ぎ)て(て)与(たま)へ(へ)老(らう)女(にょ)大(だい)小(せう)悦(えつ)比(ひ)件(けん)の書(しよ)物(ぶつ)を數(あま)度(たび)お(お)頂(たか)丸(まる)く(く)礼(れい)謝(しゃ)  
を(を)述(の)べて(て)立(た)出(で)教(きやう)の(の)ま(ま)良(りやう)弁(べん)杉(すぎ)の幹(かん)小(こ)貼(た)せ(せ)其(その)辺(へ)り(り)小(こ)在(あ)り(り)在(あ)り(り)て(て)ど(ど)規(ぎ)ひ(ひ)居(ゐ)る(る)  
其(その)翌(あつ)日(にち)良(りやう)弁(べん)僧(そう)正(せい)八(はつ)例(れい)の(の)ま(ま)乘(のり)輿(よ)小(こ)駕(が)從(じゆ)者(しや)と(と)召(め)連(れん)て(て)春(はる)日(にち)明(めい)神(じん)奉(ほう)詣(ぎ)あ  
り(り)下(げ)向(むか)ひ(ひ)良(りやう)弁(べん)杉(すぎ)の(の)下(した)と(と)輿(よ)上(あ)り(り)下(げ)杉(すぎ)向(むか)ひ(ひ)陀(だ)羅(ら)尼(に)を(を)誦(じゆ)十(じゆ)念(ねん)と(と)唱(な)れ  
る(る)小(こ)幹(かん)一(いつ)紙(し)の書(しよ)記(ぎ)を(を)貼(た)せ(せ)る(る)僧(そう)正(せい)異(い)々(ざ)徒(た)弟(あに)小(こ)捲(ま)り(り)と(と)せ(せ)採(さい)上(あ)り(り)見(み)  
ら(ら)る(る)小(こ)近(きん)州(しゆ)志(し)賀(が)の(の)里(り)の(の)者(しや)お(お)て(て)二(に)十(じゆ)年(ねん)以(い)前(ぜん)二(に)才(さい)小(こ)か(か)る(る)男(おとこ)子(こ)と(と)鷲(しゆ)取(と)り(り)これ  
より(より)此(この)年(ねん)月(げつ)日(にち)本(ほん)國(こく)中(ちゆう)と(と)尋(たず)め(め)る(る)回(わい)り(り)小(こ)東(とう)大(だい)寺(じ)の(の)良(りやう)弁(べん)僧(そう)正(せい)も(も)御(ご)幼(ごう)少(せう)の(の)初(しよ)鷲(しゆ)鳥(とり)お  
と(と)れ(れ)の(の)ひ(ひ)と(と)此(この)杉(すぎ)の(の)梢(さか)小(こ)居(ゐ)り(り)由(よし)人(ひと)の(の)物(ぶつ)語(ご)お(お)ま(ま)と(と)相(あ)似(に)る(る)更(さら)あ(あ)れ(れ)積(つ)り(り)  
回(わい)り(り)ま(ま)り(り)と(と)思(おも)ひ(ひ)ひ(ひ)と(と)高(かう)貴(き)の(の)御(ご)身(み)小(こ)直(ちき)小(こ)尋(たず)問(もん)を(を)ん(ん)か(か)り(り)お(お)た(た)く(く)此(この)書(しよ)記(ぎ)を(を)御(ご)

目(め)小(こ)け(け)ん(ん)と(と)貼(た)置(ち)置(ち)也(や)と(と)書(し)る(る)良(りやう)弁(べん)僧(そう)正(せい)小(こ)徹(てつ)若(じやく)堂(どう)小(こ)向(むか)ひ(ひ)此(この)書(しよ)記(ぎ)を(を)貼(た)せ(せ)  
一(いつ)者(しや)此(この)辺(へ)小(こ)在(あ)り(り)を(を)尋(たず)め(め)て(て)連(れん)き(き)れ(れ)と(と)命(いのち)す(す)る(る)小(こ)若(じやく)堂(どう)領(りやう)掌(しやう)其(その)辺(へ)と(と)尋(たず)め(め)  
小(こ)人(ひと)の(の)非(ひ)人(にん)の(の)姥(おば)此(この)方(かた)を(を)眺(なが)り(り)居(ゐ)る(る)其(その)余(あ)り(り)人(ひと)も(も)お(お)ろ(ろ)ろ(ろ)を(を)老(らう)女(にょ)小(こ)向(むか)ひ(ひ)你(お)の(の)杉(すぎ)の  
木(き)小(こ)書(しよ)記(ぎ)を(を)貼(た)せ(せ)る(る)者(しや)と(と)不(ふ)知(ち)や(や)と(と)問(もん)小(こ)老(らう)女(にょ)喜(き)げ(げ)小(こ)杉(すぎ)の(の)木(き)小(こ)書(しよ)記(ぎ)を(を)貼(た)せ(せ)る(る)小(こ)妻(さい)  
お(お)て(て)ひ(ひ)と(と)答(こた)え(え)を(を)若(じやく)堂(どう)與(よ)を(を)醒(さ)め(め)お(お)か(か)る(る)三(さん)回(わい)り(り)と(と)其(その)由(よし)と(と)僧(そう)正(せい)小(こ)上(あ)り(り)小(こ)其(その)音(ね)  
を(を)是(こゝ)呼(よ)寄(よ)よ(よ)と(と)近(きん)呼(よ)寄(よ)き(き)を(を)は(は)り(り)と(と)見(み)ら(ら)る(る)小(こ)蓬(ほう)の(の)髮(かみ)芒(ぼう)を(を)束(たば)く(く)る(る)  
と(と)乱(らん)き(き)身(み)小(こ)破(や)裂(れつ)衣(い)と(と)綴(つ)れ(れ)衣(い)と(と)纏(まと)ひ(ひ)と(と)見(み)苦(くる)げ(げ)あ(あ)る(る)姥(おば)地(ぢ)上(じやう)小(こ)蹲(つん)り(り)居(ゐ)る(る)  
僧(そう)正(せい)老(らう)女(にょ)小(こ)向(むか)ひ(ひ)此(この)書(しよ)記(ぎ)を(を)杉(すぎ)の(の)木(き)小(こ)貼(た)せ(せ)る(る)小(こ)你(お)た(た)り(り)と(と)問(もん)小(こ)老(らう)女(にょ)と(と)頭(かぶ)と(と)此  
上(あ)り(り)小(こ)妻(さい)お(お)て(て)ひ(ひ)と(と)答(こた)え(え)る(る)僧(そう)正(せい)と(と)仰(おほ)せ(せ)る(る)小(こ)我(われ)も(も)幼(ごう)少(せう)の(の)郎(らう)就(じゆ)鳥(とり)小(こ)と(と)れ(れ)て(て)此  
杉(すぎ)の(の)梢(さか)小(こ)在(あ)り(り)師(し)の(の)御(ご)房(ぼう)の(の)御(ご)物(ぶつ)語(ご)お(お)て(て)ま(ま)り(り)と(と)然(しか)も(も)世(よ)小(こ)似(に)と(と)る(る)更(さら)お(お)ま(ま)り(り)と(と)有(あ)り(り)  
ひ(ひ)你(お)が(が)鷲(しゆ)鳥(とり)小(こ)取(と)り(り)見(み)小(こ)と(と)如(ごと)く(く)何(なに)なる(る)證(しやう)據(こ)や(や)あ(あ)る(る)と(と)問(もん)小(こ)老(らう)女(にょ)答(こた)えて(て)貧(びん)乏(ぼく)身(み)小(こ)

ていへむ。我兒お著せし八羽を綴り合せし針目衣にて肌お八妻が縫し漆箔の守  
 囊お夫の念に佛ある一十八歩の觀音菩薩の像を納て掛させられ其餘おま  
 燈とを布れ品ゆひむごとと言ていす。終るお僧正大いお脚喜悅あり。それこそ  
 慥なる燈迹たれ其守囊と見お非るごと。首お掛られる錦の守囊より  
 又二ッの守囊と採出して見せられ。老女手お取てお縫た是こそお妻が手縫  
 ぬせし守囊お経わくいとのおと僧正も且悦び且哀。諸お多年尋の慕ひ  
 我母おて在るごとや。我いお東西をも弁おる時鷲おとれ己お惡鳥乃  
 甜とお入る。お師の御房の惠もて危れ命と助。刺へ師匠の慈悲お  
 依て成長するお付。実の父母現お在るも其所在知れぬ。春日明神へ  
 祈願とて。法勢の違あるごとお社参り。下向する度お此杉の下へ立寄。陀羅尼  
 を誦し十念と唱るも。父母存命あるも息災延命の祈禱のため。お此没のひ

いおむ。後生善所の為なり。世上の人を皆父母お孝艱を尽くともあるお。良  
 弁の如何あれも幼少お例稀ある大難お遭適師匠の慈悲心お死た  
 一命と助けられせむ。父母の名所を知られぬ。却在家と尋ねぬ。便おなく  
 さしお慈母の三十余年の永れ年月緒願の深山荒野を尋ね送ひ。餓凍おひ  
 し。成もまらぬ。我の飽すまでお冷ひ温お衣て光陰を送り。不孝の程こそ悲  
 くれ。これお神佛お捨られぬ。春日明神の御利生三密の冥助おより。海中の優  
 曇華お勝。実母お廻り會し忝けおきよと。春日の宮社を遥拜し。歡喜  
 ある更限りなく。老母と乘輿お駕て東大寺へ歸り。沐浴させ衣服を著更  
 一室お住し。朝夕孝艱を尽され。世人皆其奇縁を感。老  
 母お多年の望も足て。昨鳥の飢寒お相及錦衣王食お飽。誓を以て佛門お入  
 且夕續經念佛し。八十才で存生して。終小往生の素懐を遂らし。良弁僧

正母公の靈と二社の神小鎮條子安明神と号し朝夕齋結ありと云  
其初今猶南都大佛の乾の隅あり小兒の猪病を祈せむ必む驗有と云

近州石山寺建立

從奥州始獻黃金條

却說大佛の銅像成就されしを聖武天皇御歡喜斜ありと云然れども佛身  
小押なり竹伯無り然れ此義如何を群臣と集て御評議あり小吾朝  
いよ黄金を産する地なりと云世上有所の金錢を聚め竹伯おけて押入り  
別手手段あり前より此時代まで唐土よりくる金錢の是と云人々多れも左ありて世上の財減とて  
万民の融通を妨ぐ難れを宜うと云猶百般評議の上和州金峰山六金を  
産する山なりと云金の御撥とも稱され彼山を堀せむと云自金と得る  
更りやゆらんと云は奏聞ヤ々多し天皇実中思召然れ先金峰山の藏  
王権現小其由を告然と云后山を堀しむると云良弁僧正を勅使と

て金峰山へ赴り良弁僧正勅詔を奉り芳野へ入り藏王堂へ齋結と

勅宣と續山を堀て金と求むる旨と祈念し其夜堂内小通夜法絶の徒

汝續痛せしめ頻り小睡眠きざ寝ともかく同睡と云る小藏王権現形

と現れ枕頭小して良弁小告むり今般帝盧遮那佛の銅像と造りゆ

其箱小用ひんる雷山の金成堀せんる睿慮八宜され我山の金はいま堀

取ぬれ時節末と云末世ありて自然と金の出る期有也但江州勢田

の御小觀音有縁の靈場あり彼所小一字の堂舎と建す如意輪觀音の像

汝作て安置して黄金と祈求りむり遠くもとて倭國の中黄金と産する地出

来し金と獻ぐる人有て宿十小調率此旨を奏聞しいと告りて見て夢覺

たり良弁奇異の思ひを夢想小任りて芳野と云都へ歸りて権現の御告と

帝へ奏聞せしめを近江國勢田の郷小靈場を見し觀音堂を建



良寺僧正石山  
釣るる石よわい  
音大々勸請  
とんた地の  
と専の

良寺僧正

良寺僧正石山



良明神化身

良明神化身

十一

一黄金の出る地を祈る。是を良弁僧正と勅  
 命。心して江明へ赴た。勢田の郷ありて何所か  
 觀音の靈場なるを。東西南  
 北を徘徊し。ある山中へ登りて見ると。奇石怪岩  
 田圃として左を。仙境  
 のごとくあれど。此所を觀音の靈場なりとて。一山を見廻らるる。山中一流の清  
 水あり。其汀の岩の腰を。けて鉤を垂る。翁あり。僧正を見く。釣をけ。如  
 何良弁我此所。在て你を待。更久し。曰知己の。よく言々。翁を。僧正心。疑。是  
 凡尔。あを。と。神仙。か。る。尊。と。思。以。進。寄。て。拜。を。お。し。拙。僧。い。ま。と。仙。翁。小。相。見。せ。り。更  
 ち。あ。れ。ふ。名。と。知。り。一。脚。身。八。何。人。も。在。て。在。と。や。と。向。ま。る。る。小。老。翁。微。笑。し。你。志。し。と。や。我  
 ち。是。比。良。明。神。なり。此。山。と。觀。音。有。縁。の。靈。地。なり。你。此。地。小。堂。宇。と。建。て。觀。音  
 を。安。置。す。丹。書。を。凝。て。祈。る。あ。を。求。る。所。の。黄。金。必。と。東。國。より。出。り。王。家。へ。獻  
 じ。を。又。此。池。の。觀。音。の。功。徳。水。と。湛。れ。を。未。代。まで。衆。生。の。疫。病。を。救。ふ。薬。水

一勤めよと教示の心。神風に乗。比良の嶽。の。方。へ。飛。去。り。ひ。た。れ。良。弁。僧  
 正。感。涙。と。も。小。脚。後。を。伏。拜。と。急。た。都。へ。歸。り。て。比。良。明。神。の。脚。教。示。を。依。て。觀  
 音。の。靈。地。を。尋。得。し。義。を。奏。し。や。ま。れ。を。帝。睿。感。す。く。工。匠。小。命。と。彼  
 所。小。佛。堂。を。建。す。り。め。り。良。弁。僧。正。六。佛。師。小。本。女。て。如。意。輪。觀。音。の。像。と。刻。ま。せ。其  
 腹。内。に。彼。父。母。の。記。念。の。觀。音。の。像。八。寸。を。納。め。翁。の。腰。に。け。り。山。石。と。臺。座。と。て。堂。内  
 小。女。置。せ。れ。る。今。の。石。山。寺。是。り。斯。く。佛。堂。本。尊。と。も。成。就。し。た。良。弁。僧  
 正。を。佛。前。小。糸。巻。帯。して。千。年。陀。羅。尼。普。門。品。を。積。福。し。心。小。宿。代。の。金。と。得。き  
 せ。り。と。細。祈。せ。れ。る。小。靈。驗。空。り。す。天。平。十。六。年。真。洲。の。國。司。百。海。王。敬。福  
 百。倍。國。司。日本。渡。り。日。國。小。田。郡。より。始。て。黄金。を。掘。出。し。煉。金。二。万。三。千。六。百。兩。を  
 真。洲。の。國。司。が。入。り。都。へ。獻。す。是。日本。小。金。と。産。する。始。り。聖。武。天。皇。脚。欣。悦。限。り。なく。是。偏  
 小。藏。王。推。現。の。靈。告。石。山。寺。の。觀。音。の。利。益。す。八。造。を。せ。し。盧。遮。那。佛。の

功德小なる所なりとて、弥三宮御飯依深く、百濟王敬福の宣位と昇進させ、  
祿を増加せし、良弁僧正の多く、賞物と給りたり。大伴家持、倭國の黄金の始て出、  
更を祝し、なりてよめる。和哥小曰

とあらざれば、御代さへ人と東ある陸奥山の黄金とあさく、  
斯く大佛の宿綱ひしを佛鉢の押江洲紫香樂郡の大伽羅と建立し、安  
置し、ひし寺と甲賀寺と号け、肉眼供養、嚴重小執行ひし、帝群臣と侍て、御  
幸なりし、ひしを近國遠國の貴賤老若群集して感涙を流さむと、  
日二十年太上天皇元正天皇山明御より、御尊殿と大和國添上郡奈保  
山の陵に葬り、なりし、ひしを、  
四十六代孝謙天皇とやなる、即ち女帝小て、御禪、河内親王高野姫とやせ  
す。聖武天皇の皇女小て、御母、光明皇后なり。天平十年、小皇太子小、  
今

十善の帝位小、即ち天平二十一年改元ありて、天平勝寶元年と、  
太上天皇の尊号と奉り、  
御悼惜、  
申移し、  
檀を築、  
就し、  
ひ、  
せ、  
歡喜と佛前、  
敬

三寶之奴奉奏、盧遮那像前此大倭國者、天地開闢以來



雖有黃金自入國獻之未有斯地時國中東方陸奥國之王  
從五位上白河王敬福自部内小田郡獻黃金此敬福悅

佛慈賜烏恐戴持率百官奉禮拜

十善万乘の君之佛像を崇めりて三空の奴と稱り稱り入程の御更  
も増て況や供奉の公卿末々の身涯丸鞆猶以て恭敬禮拜し一各佛  
名を稱へて尊と多此日の導師善提僧正とて南天竺より来朝せし尊  
死名僧かり寺中小相結し五千人の僧徒各妙法を續續入佛供養を  
更なれども殊勝おて聖衆も茲未降し俱小供養と受りて思ふ  
許す上下の感涙を流しける斯て大法更滞りたり果れり空天  
皇光明皇后を始とす供奉の百官まで下向有都て今日の儀式元月  
式と等しく公卿大夫波の輩まで皆礼服と整て供奉しは更なれ其

壯麗なる更緒人々眼眩をまじり更なり聖徳太子佛法をまじり  
より以来各會の法式今日の如く嚴重威威なる未有之儀小佛法敏示昌の  
時とりて且現今日の導師成り善提僧正とて南天竺の名僧たりが  
五基山の文殊菩薩を拜せんと南天竺を出る大唐渡り五基山へ登  
りける山申おて一人の老翁小逢ね翁が白你何國へ行や善提答て我  
之當山の文殊菩薩を拜せんと登山するなりと白れ公羽が白文殊此山  
お不在今東海の日本小純生りて你文殊菩薩を拜せんとお日本  
到るなりと教へ忽ち虚空へ起去るおと善提おら公羽の後と禮拜し  
それより下中日本へ渡んと船小乗海上に立ちてけるお海上より大唐林邑國  
の僧佛哲より入是も日本より入んと船小く大海へ渡るが難風小遭り船を  
損ひ難波お及び漂ひける小往會巨細を空り善提我船小佛哲と逢り

とも小日本とて船を走らせり。然るに前に入寂せし行基のまが在世の時天  
 平八年七月聖武天皇の奏に、貧道過去生の縁ある僧。今皇國へ入り  
 来りしあひて迎へ来りしを。願くは樂人を貸さるるを。願ひをなせ。即ち勅  
 許ありて。礼部・鳴臚・雅樂・三寮の官人。詔命ありて。行基とも小振州浪  
 速の津（赴）りて。斯て行基。百余人の徒弟を率ひ。樂人とも小浪速乃海  
 濱ありて。音樂を奏し。待多所。善提佛哲二人。船と岸。乘著陸（上）り  
 たり。行基二僧と迎へ。忘答とて。曰より。相織人の。即ち行基哥と縁  
 て曰。靈山の親辺の御前。契りて。真如朽せと逢入つる。其時善  
 提返哥と縁と曰。迦毘羅會の。小契り。甲斐ありて。文珠の御貞逢  
 入つる。斯て行基。兩僧を同伴と都（歸）り。帝。奏し。兩僧。小天顔を  
 拜せり。然るに。帝。大に歡喜。一の二僧と。大女寺。小止宿せり。ゆひ。行基

善提原寺へ歸られり。其後善提佛哲と菅原寺へ迎られり。先年より菅  
 原寺の側の岡。一人の翁。拙く。其姓名を。知者なく。三年以来。言を。又起され  
 り。緒人。啞の聲。なるべしと思ひ。然るに。彼翁。折り。首と。上て。東の方。望み。えけ  
 る。今善提佛哲。来りて。菅原寺へ入る。翁。俄起り。其身も。寺へ  
 入。善提佛哲と。手と。携て。相語り。時。ある。かく。縁。熟せる。おと。縁ひ。三人  
 ひ。舞躍り。公。翁。ハ。寺と。立。出。其。行。所。を。知。者。わ。後。小。翁。が。伏。居。る。所。を  
 伏見の岡と。号け。公。翁。を。伏見の翁と。呼ぶ。と。実。小。希。有。の。晴。令。り。斯。て。  
 後。小。善。提。佛。哲。も。小。帝。御。信。仰。あり。て。兩。僧。も。小。僧。正。の。官。と。授。け。む。ひ  
 たり。本朝樂部の中。小善提校頭の舞林。邑の樂ある。其。此。善。提。佛。哲。が。傳。る  
 所。なり。後。年。淡。路。の。廢。帝。の。天。平。寶。字。四。年。二。月。二。五。日。小。善。提。僧。正。と  
 遷化せられり。天平十年。小遣唐使。大伴。古。大。呂。が。歸。朝。の。節。唐。の。揚。州。竟。興

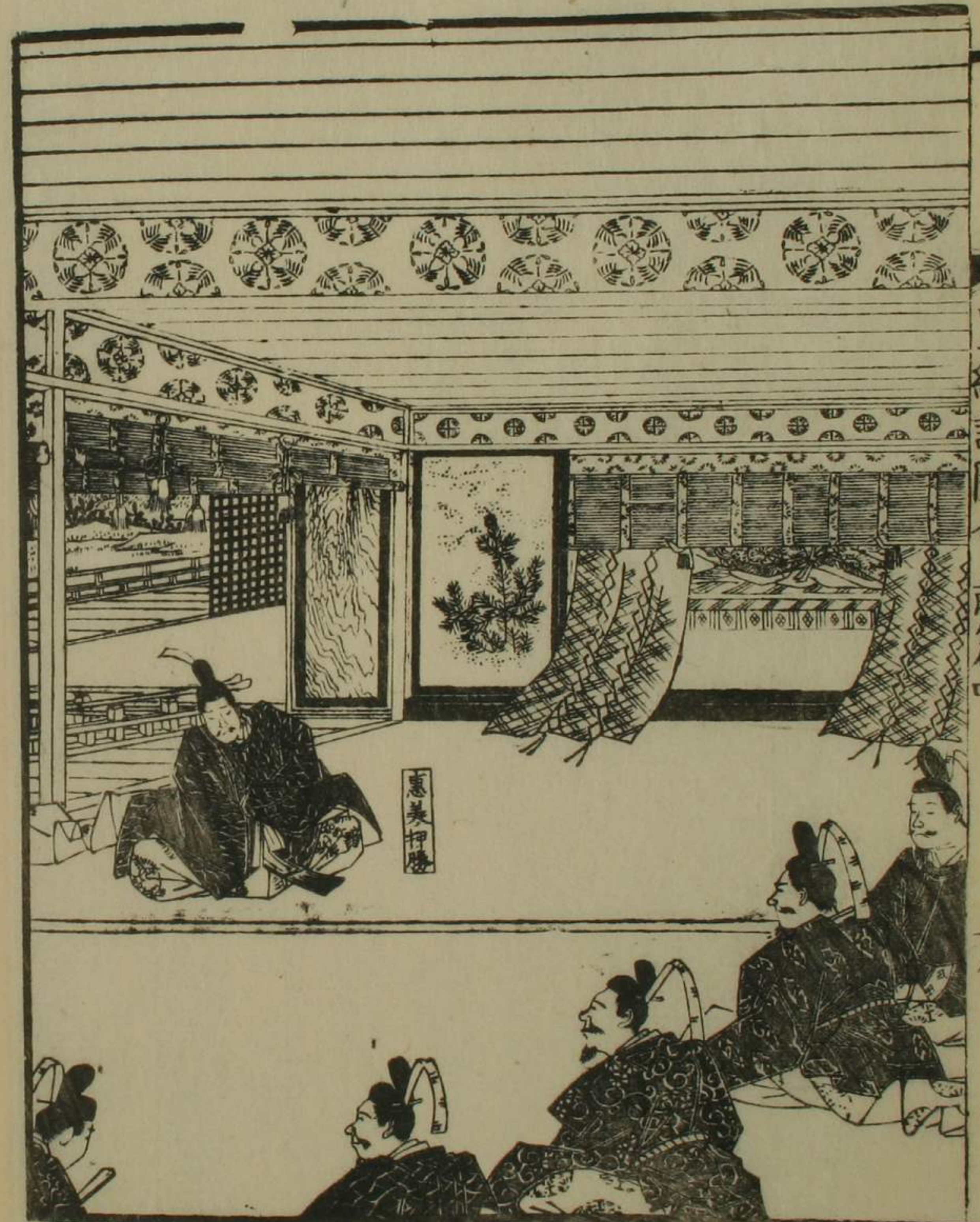
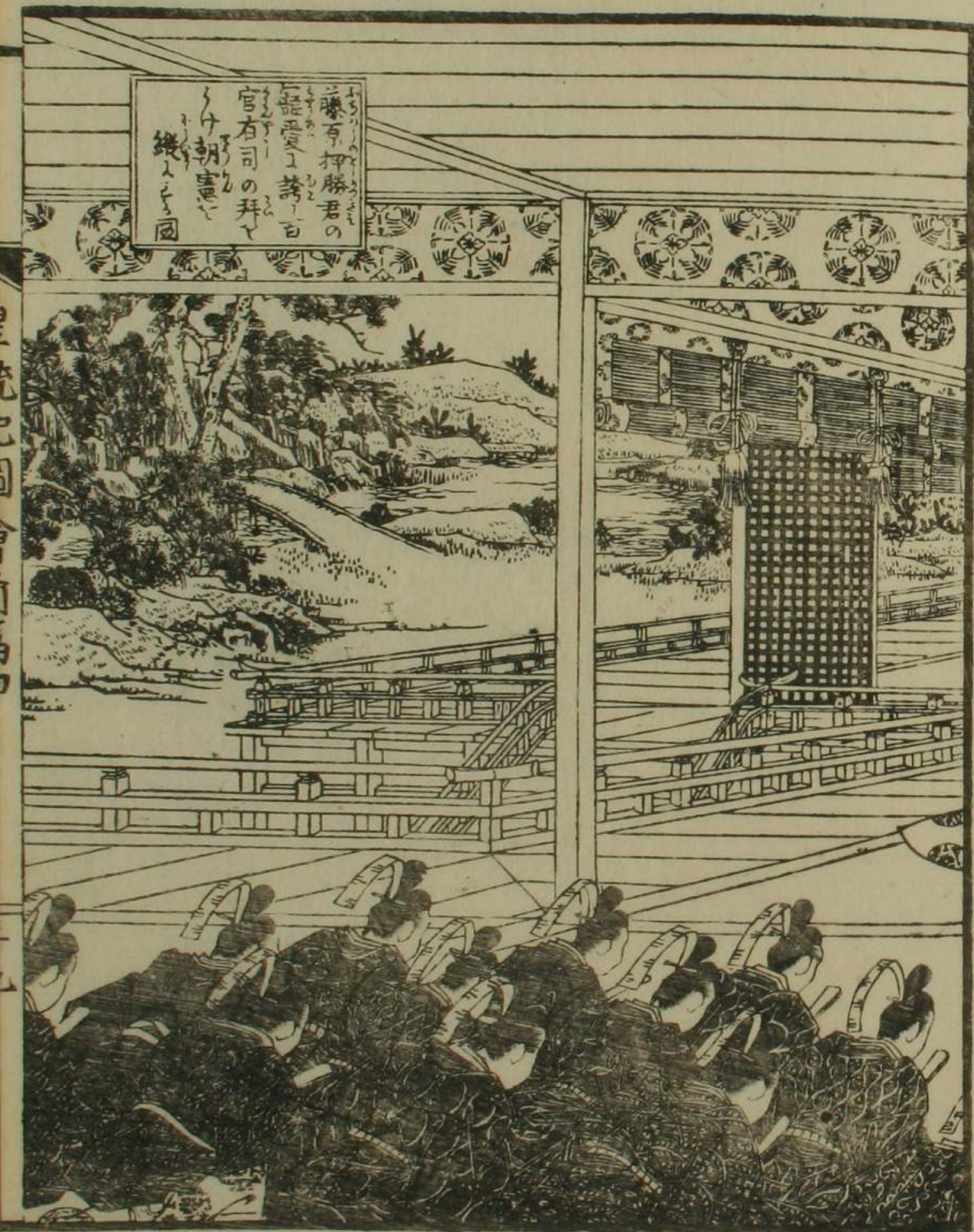
寺の僧鑑真来朝し、帝東大寺に任ぜり。此鑑真、揚州江陽縣の産なり。戦國の時、魯の弁士淳于髡が後、鑑真は博く経論に涉り、又医療の術に通じ、尤戒律に精く。唐土より持来るところの佛舍利三十粒、阿育王の塔様銅支提止觀を義文句、菩提子三斗、晋の王羲之が真行の書一卷、亦て献上しける。聖武帝甚く御崇敬せり。鑑真を戒師として受戒し、のひかり曾て一切経論の往く誤るる字と校正せしむるは、是れ能正と者ふる。小鑑真と一切経を暗記し、悉く其誤字と正しき。又諸菜種の真偽を分ち、其名と付し、めし、小鑑真鼻を以て香と嗅、其真偽を分ち、一品も錯り并まじ。光明皇后御不例の時、鑑真御坐と進めたり。忽ち強ありて御平愈かり、のひかり。是れ小依て大僧正の官と授け、のひかり僧勢煩難なるも、改めて大和尚の号と賜ひ、備前國小於水田二百町と給り。又新

田部親王の旧宅を給りて寺院とす。今の招提寺是なり。此鑑真も天平宝字七年五月七十五才にて遷化せられり。菩提佛舎鑑真皆聖武帝の御依僧。聖武天皇崩御。惠美押勝、鑿君、電更。

天平勝宝八年。太上天皇。聖武去年より御怒あり、せのひれむ。医療、小及みず。緒社の祈禱、緒寺の加持、丹誠を抽でざる方もなり。且天下小大赦と行れ。艱寡孤独の者、貧窮の者、老躰の者、亦米錢を絶し、賑恤のひかり。少く御快氣の休め、えさせのひかり。又も御怒再發、のひかり。小宝篋五十六才、小崩御かり、のひかり。光明皇后の御愁傷、ハヤも更なり。當今緒宮方緒臣下の悲歎、大方なるといふも、さて有果、命を非れむ。尊嚴を収め、御葬式の禮を嚴重おして、和州佐保山の陵に葬り、なり。と悲しむ。崩御の前、小御髪をまつ、のひかり。御法名を満勝と号し、のひかり。是帝王御剃髪

乃如<sup>なり</sup>如<sup>なり</sup>抑<sup>おさ</sup>此<sup>この</sup>帝<sup>みかど</sup>ハ<sup>は</sup>佛<sup>ぶつ</sup>法<sup>ぽう</sup>を崇<sup>たつと</sup>び<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>本<sup>ほん</sup>朝<sup>てう</sup>ハ<sup>は</sup>出<sup>い</sup>生<sup>せい</sup>せ<sup>せ</sup>名<sup>な</sup>僧<sup>そう</sup>ヲ<sup>を</sup>所<sup>しよ</sup>  
 謂<sup>い</sup>行<sup>ぎやう</sup>基<sup>き</sup>良<sup>ら</sup>舟<sup>ふね</sup>道<sup>みち</sup>慈<sup>じ</sup>泰<sup>たい</sup>澄<sup>じやう</sup>其<sup>その</sup>余<sup>あ</sup>ハ<sup>は</sup>等<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>小<sup>こ</sup>違<sup>ちが</sup>わ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>異<sup>い</sup>國<sup>こく</sup>ヨ<sup>よ</sup>来<sup>き</sup>朝<sup>てう</sup>セ<sup>せ</sup>高<sup>たか</sup>  
 僧<sup>そう</sup>ハ<sup>は</sup>善<sup>ぜん</sup>提<sup>だい</sup>佛<sup>ぶつ</sup>哲<sup>てつ</sup>道<sup>だう</sup>璿<sup>せん</sup>鑑<sup>かん</sup>真<sup>しん</sup>ホ<sup>は</sup>ナ<sup>り</sup>佛<sup>ぶつ</sup>法<sup>ぽう</sup>中<sup>ちゆう</sup>興<sup>きやう</sup>ノ<sup>の</sup>君<sup>きみ</sup>ト<sup>と</sup>ナ<sup>り</sup>斯<sup>かく</sup>テ<sup>は</sup>其<sup>その</sup>年<sup>ねん</sup>モ<sup>も</sup>  
 綜<sup>しゆう</sup>圖<sup>ず</sup>ノ<sup>の</sup>忌<sup>い</sup>ホ<sup>は</sup>互<sup>たが</sup>互<sup>たが</sup>暮<sup>くれ</sup>明<sup>めい</sup>モ<sup>も</sup>天<sup>てん</sup>平<sup>へい</sup>勝<sup>しやう</sup>室<sup>しつ</sup>九<sup>く</sup>年<sup>ねん</sup>ノ<sup>の</sup>春<sup>はる</sup>ホ<sup>は</sup>成<sup>な</sup>る<sup>る</sup>其<sup>その</sup>正<sup>せい</sup>月<sup>げつ</sup>改<sup>か</sup>元<sup>げん</sup>ア<sup>は</sup>テ<sup>は</sup>天<sup>てん</sup>  
 平<sup>へい</sup>室<sup>しつ</sup>字<sup>じ</sup>元<sup>げん</sup>年<sup>ねん</sup>ト<sup>と</sup>号<sup>ごう</sup>せ<sup>せ</sup>れ<sup>る</sup>同<sup>どう</sup>正<sup>せい</sup>月<sup>げつ</sup>ハ<sup>は</sup>左<sup>さ</sup>大<sup>だい</sup>臣<sup>しん</sup>正<sup>せい</sup>位<sup>い</sup>攝<sup>しやく</sup>緒<sup>しよ</sup>兄<sup>ぎやう</sup>卿<sup>きやう</sup>薨<sup>かう</sup>去<sup>き</sup>せ<sup>れ</sup>れ<sup>る</sup>  
 邁<sup>まい</sup>齡<sup>れい</sup>七<sup>しち</sup>十<sup>じゆ</sup>四<sup>し</sup>才<sup>さい</sup>ナ<sup>り</sup>孝<sup>かう</sup>謙<sup>けん</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>甚<sup>じん</sup>ニ<sup>に</sup>惜<sup>しやく</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>し</sup>ハ<sup>は</sup>紀<sup>き</sup>餘<sup>じよ</sup>大<sup>だい</sup>呂<sup>りよ</sup>石<sup>せき</sup>川<sup>せん</sup>豊<sup>ほう</sup>人<sup>にん</sup>ホ<sup>は</sup>遣<sup>けん</sup>  
 され<sup>て</sup>若<sup>わ</sup>孫<sup>そん</sup>系<sup>けい</sup>ノ<sup>の</sup>更<sup>さら</sup>ニ<sup>に</sup>殿<sup>てん</sup>ヲ<sup>を</sup>執<sup>しやく</sup>行<sup>ぎやう</sup>セ<sup>し</sup>ハ<sup>は</sup>此<sup>この</sup>緒<sup>しよ</sup>兄<sup>ぎやう</sup>卿<sup>きやう</sup>ハ<sup>は</sup>敏<sup>みん</sup>達<sup>たつ</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>六<sup>ろく</sup>世<sup>せい</sup>ノ<sup>の</sup>孫<sup>そん</sup>美<sup>み</sup>  
 奴<sup>ぬ</sup>王<sup>わう</sup>ノ<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>ナ<sup>り</sup>天<sup>てん</sup>性<sup>せい</sup>智<sup>ち</sup>才<sup>さい</sup>秀<sup>しゆ</sup>博<sup>はく</sup>學<sup>がく</sup>多<sup>た</sup>能<sup>に</sup>る<sup>る</sup>中<sup>ちゆう</sup>モ<sup>も</sup>國<sup>こく</sup>學<sup>がく</sup>ヲ<sup>を</sup>精<sup>せい</sup>く<sup>く</sup>和<sup>わ</sup>哥<sup>か</sup>小<sup>せう</sup>妙<sup>めう</sup>ハ  
 して<sup>は</sup>大<sup>だい</sup>伴<sup>はん</sup>家<sup>け</sup>持<sup>ぢ</sup>ト<sup>と</sup>小<sup>せう</sup>萬<sup>まん</sup>葉<sup>えふ</sup>集<sup>しふ</sup>以<sup>もつ</sup>選<sup>せん</sup>ま<sup>れ</sup>れ<sup>る</sup>緒<sup>しよ</sup>兄<sup>ぎやう</sup>公<sup>こう</sup>ハ<sup>は</sup>高<sup>かう</sup>城<sup>じやう</sup>王<sup>わう</sup>ト<sup>と</sup>  
 せ<sup>し</sup>時<sup>とき</sup>從<sup>じゆ</sup>三<sup>さん</sup>位<sup>い</sup>ハ<sup>は</sup>聖<sup>せい</sup>武<sup>ぶ</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>ノ<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>前<sup>ぜん</sup>伺<sup>ひ</sup>候<sup>こう</sup>有<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>帝<sup>てい</sup>緒<sup>しよ</sup>兄<sup>ぎやう</sup>公<sup>こう</sup>ヲ<sup>を</sup>御<sup>ご</sup>電<sup>でん</sup>遇<sup>ぐ</sup>乃<sup>の</sup>  
 余<sup>あま</sup>リ<sup>に</sup>南<sup>なん</sup>庭<sup>てい</sup>ノ<sup>の</sup>攝<sup>しやく</sup>ノ<sup>の</sup>実<sup>じつ</sup>ヲ<sup>を</sup>召<sup>め</sup>きて<sup>し</sup>御<sup>ご</sup>土<sup>と</sup>岳<sup>がく</sup>ヲ<sup>を</sup>添<sup>そ</sup>へ<sup>て</sup>賜<sup>たま</sup>は<sup>り</sup>祝<sup>い</sup>ハ<sup>は</sup>御<sup>ご</sup>制<sup>せい</sup>ヲ<sup>を</sup>曰<sup>い</sup>  
 皇統記圖會前編

ち<sup>ち</sup>ち<sup>ち</sup>ハ<sup>は</sup>ハ<sup>は</sup>実<sup>じつ</sup>ニ<sup>に</sup>花<sup>はな</sup>化<sup>け</sup>ス<sup>る</sup>ト<sup>と</sup>ノ<sup>の</sup>葉<sup>えふ</sup>ニ<sup>に</sup>枝<sup>えだ</sup>ハ<sup>は</sup>霜<sup>しも</sup>ヲ<sup>を</sup>積<sup>た</sup>ま<sup>り</sup>て<sup>は</sup>常<sup>じやう</sup>般<sup>ぱん</sup>盤<sup>ばん</sup>木<sup>ぼく</sup>  
 う<sup>う</sup>遊<sup>ゆう</sup>ハ<sup>は</sup>攝<sup>しやく</sup>ノ<sup>の</sup>姓<sup>せい</sup>ヲ<sup>を</sup>給<sup>たま</sup>は<sup>り</sup>る<sup>る</sup>され<sup>ば</sup>緒<sup>しよ</sup>兄<sup>ぎやう</sup>公<sup>こう</sup>ノ<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>子<sup>こ</sup>孫<sup>そん</sup>ハ<sup>は</sup>汝<sup>に</sup>所<sup>しよ</sup>攝<sup>しやく</sup>ト<sup>と</sup>用<sup>もち</sup>  
 ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>此<sup>この</sup>人<sup>にん</sup>井<sup>い</sup>出<sup>で</sup>ノ<sup>の</sup>邑<sup>むら</sup>ハ<sup>は</sup>住<sup>す</sup>ま<sup>り</sup>し<sup>り</sup>也<sup>なり</sup>井<sup>い</sup>出<sup>で</sup>ノ<sup>の</sup>左<sup>さ</sup>大<sup>だい</sup>臣<sup>しん</sup>ト<sup>と</sup>稱<sup>せう</sup>さ<sup>る</sup>是<sup>こゝ</sup>ハ<sup>は</sup>且<sup>かつ</sup>也<sup>なり</sup>  
 當<sup>たう</sup>今<sup>こん</sup>先<sup>せん</sup>帝<sup>てい</sup>ノ<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>遺<sup>い</sup>勅<sup>てつ</sup>ハ<sup>は</sup>依<sup>よ</sup>り<sup>て</sup>中<sup>ちゆう</sup>務<sup>ぶ</sup>卿<sup>きやう</sup>道<sup>だう</sup>祖<sup>そ</sup>王<sup>わう</sup>ヲ<sup>を</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>は</sup>皇<sup>かう</sup>太<sup>たい</sup>子<sup>し</sup>ハ<sup>は</sup>互<sup>たが</sup>互<sup>たが</sup>ひ<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>  
 是<sup>こゝ</sup>君<sup>きみ</sup>ハ<sup>は</sup>新<sup>しん</sup>田<sup>てん</sup>部<sup>ぶ</sup>親<sup>しん</sup>王<sup>わう</sup>ノ<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>子<sup>こ</sup>ナ<sup>り</sup>天<sup>てん</sup>武<sup>ぶ</sup>帝<sup>てい</sup>ノ<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>孫<sup>そん</sup>ナ<sup>り</sup>然<sup>しか</sup>レ<sup>ど</sup>其<sup>その</sup>頂<sup>てい</sup>大<sup>だい</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>げん</sup>藤<sup>ふじ</sup>原<sup>げん</sup>  
 仲<sup>ちゆう</sup>上<sup>じやう</sup>呂<sup>りよ</sup>ト<sup>と</sup>り<sup>り</sup>武<sup>ぶ</sup>智<sup>ち</sup>丸<sup>まる</sup>ノ<sup>の</sup>三<sup>さん</sup>男<sup>なん</sup>ハ<sup>は</sup>右<sup>みぎ</sup>大<sup>だい</sup>臣<sup>しん</sup>豊<sup>ほう</sup>皇<sup>かう</sup>威<sup>い</sup>ノ<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>將<sup>しやう</sup>姫<sup>ひめ</sup>ノ<sup>の</sup>舍<sup>せ</sup>弟<sup>てい</sup>ナ<sup>り</sup>る<sup>る</sup>孝<sup>かう</sup>謙<sup>けん</sup>  
 天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>ノ<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>電<sup>でん</sup>愛<sup>あい</sup>甚<sup>じん</sup>ニ<sup>に</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>は</sup>仲<sup>ちゆう</sup>上<sup>じやう</sup>呂<sup>りよ</sup>權<sup>けん</sup>威<sup>い</sup>ト<sup>と</sup>恣<sup>し</sup>す<sup>る</sup>ハ<sup>は</sup>曾<sup>そう</sup>て<sup>は</sup>舍<sup>せ</sup>人<sup>にん</sup>親<sup>しん</sup>王<sup>わう</sup>ノ<sup>の</sup>  
 御<sup>ご</sup>子<sup>こ</sup>大<sup>だい</sup>炊<sup>し</sup>王<sup>わう</sup>ハ<sup>は</sup>我<sup>われ</sup>女<sup>によ</sup>ト<sup>と</sup>娶<sup>めと</sup>り<sup>し</sup>自<sup>みづか</sup>分<sup>ぶん</sup>ノ<sup>の</sup>館<sup>くわん</sup>中<sup>ちゆう</sup>ハ<sup>は</sup>美<sup>み</sup>く<sup>く</sup>ハ<sup>は</sup>殿<sup>てん</sup>宇<sup>う</sup>ト<sup>と</sup>造<sup>つく</sup>り<sup>し</sup>致<sup>いた</sup>す<sup>る</sup>大<sup>だい</sup>炊<sup>し</sup>王<sup>わう</sup>  
 夫<sup>ふう</sup>婦<sup>ふ</sup>ト<sup>と</sup>任<sup>にん</sup>じ<sup>り</sup>り<sup>て</sup>相<sup>あひ</sup>睦<sup>むつ</sup>々<sup>々</sup>何<sup>なに</sup>牟<sup>む</sup>皇<sup>かう</sup>太<sup>たい</sup>子<sup>し</sup>道<sup>だう</sup>祖<sup>そ</sup>王<sup>わう</sup>ト<sup>と</sup>廢<sup>はい</sup>す<sup>る</sup>大<sup>だい</sup>炊<sup>し</sup>王<sup>わう</sup>ト<sup>と</sup>儲<sup>たくわん</sup>君<sup>きみ</sup>ト<sup>と</sup>  
 して<sup>は</sup>己<sup>おのれ</sup>外<sup>がひ</sup>戚<sup>せき</sup>ノ<sup>の</sup>威<sup>い</sup>ヲ<sup>を</sup>逞<sup>てい</sup>ま<sup>す</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>百<sup>ひやく</sup>般<sup>ぱん</sup>奸<sup>けん</sup>計<sup>けい</sup>ヲ<sup>を</sup>構<sup>かま</sup>へ<sup>り</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>道<sup>だう</sup>祖<sup>そ</sup>王<sup>わう</sup>ノ<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>更<sup>さら</sup>  
 と惡<sup>あく</sup>き<sup>き</sup>ハ<sup>は</sup>潛<sup>せん</sup>想<sup>きやう</sup>ハ<sup>は</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>ト<sup>と</sup>兼<sup>かね</sup>て<sup>は</sup>仲<sup>ちゆう</sup>上<sup>じやう</sup>呂<sup>りよ</sup>ト<sup>と</sup>帳<sup>ちやう</sup>内<sup>ない</sup>ハ<sup>は</sup>近<sup>ちか</sup>づ<sup>け</sup>御<sup>ご</sup>内<sup>ない</sup>電<sup>でん</sup>在<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>



皇統記圖會前卷四

すくもつ(仲)名が奏する事大となく小となり用ひも今度の儀奏とも信  
 りて太子と廢り大炊王と太子小立を旨と諸臣下(勅)詔のいれむ群  
 臣大(小)發た列位自を見合と一言由發する人なり。時仲(六)呂の兄右大臣豊  
 成堪ひて位階を進出倫言ふてハいとも道祖王の御(更)先帝の御(遣)詔  
 ふく皇太子小立せのひ。今させる御(過)ちのたれ(廢)るを(恐)るは(當)り  
 といと練奏中されれども天皇敢て御(許)容なく。遂(ち)道祖王を廢り。大炊  
 王と皇太子小立のひ。是君也天武帝の御(孫)おて(と)せの皇(御)又(と)舍人親  
 王たり。後(小)淡路の廢帝と(と)せり。去(程)小(天)皇(六)仲(六)呂と御(電)意(の)余(り)は(紫  
 微)内相と(と)官と授ける。是(禁)廷内外の武官と(司)る(重)任(を)て其(作)法(を)か  
 大臣の(と)威勢(兄)豊成の(と)小(出)者(秘)目(小)増長(朝)廷の公卿を(慢)り(狂)ん  
 頗る我意の(舉)止(多)う(れ)む(百)官(百)詔(唾)吐して仲(六)呂と(己)心(憎)ま(と)り(一)

者(お) 茲(ち)小(橋)緒(兄)公(の)嫡(男)小(橋)奈(良)丸(と)入(り)る(が)仲(六)呂(君)電(小)錦(り)諸  
 臣(下)と(茂)新(一)念(小)太子と(廢)ると(我)意(を)恚(怒)り。大(件)古(六)呂(大)野(東)人(と)  
 仲(六)呂(と)討(亡)前(の)太子(道)祖(王)を(立)て。帝(位)小(即)も(と)高(議)し(る)を  
 右(大)臣(豊)成(と)ん(て)大(小)發(た)斯(て)天(下)の(強)を(成)り(と)て(奈)良(丸)の(館)に(赴)た  
 對(面)して(朝)廷(の)得(失)と(談)す。今(仲)六(呂)と(誅)せ(ん)の(公)宜(也)と(も)天(皇)宗(を)深  
 く(御)具(負)あれ(も)御(身)違(の)後(難)の(程)も(量)り。依(て)須(吏)此(一)儀(を)延(び)て(仲)六(呂)  
 六(呂)と(緘)めて(向)後(不)法(の)動(止)め(ら)う(身)の(命)と(省)也(と)歸(り)て(仲)六(呂)と(縛)偷  
 と(分)れ(て)夫(を)回(さ)る(小)仲(六)呂(早)も(奈)良(丸)古(六)呂(の)企(を)出(し)て(大)小(志)り  
 即(時)小(奈)内(り)て(奈)良(丸)古(六)呂(東)人(小)君(を)傾(け)たり。道(祖)王(と)王(位)小(進)ん(德)謀  
 を(企)め(尾)鱗(を)添(て)詭(奏)し(る)も(と)天(皇)甚(は)逆(鱗)の(仲)六(呂)小(東)一(と)  
 大(急)小(征)兵(と)向(り)道(祖)王(と)先(と)奈(良)丸(古)六(呂)東(人)以下(と)擲(り)捕(せ)の(ひ

是非の分明也及せられんを又々殊戮し其妻子徒類を皆遠嶋へ配流せんとす  
 と薄情なり然るを右大臣豊成の彼輩の隠謀と知あらず疾む由松平  
 其罪咎らんとて筑紫流罪なりといふ是皆仲大員が計らふ所あり諸人大  
 恐とせられた是非を論ずる人なく皆仲大員と疫病神のごとく忌悪とす其後天  
 宝二年八月孝謙天皇帝位と太子大炊王の禪らせりしより其より孝謙帝  
 と高野天皇ととす高野皇八仲大員と愛しむと更倍甚しく右大臣小任  
 の嘉賞して宣り大祖大織冠鎌足より以来世々明德を以て王家と異補今  
 万民安寧と得國家乱まざる良小此右大臣有由と昔伊尹と有莘氏  
 勝臣わく一度成湯と佐て遂小阿衡の号と荷ひ呂尚ハ渭濱の遺老を  
 且文王を弼け終小管丘の封を得る今右大臣ハ汎く民を惠の美古より  
 雙かり悪と禁ト暴と押へ手を静め乱小勝の功あれ其姓の中小惠美

の二字と加名と押勝と改むをて姓名と藤原惠美押勝とを賜り斯御  
 貝の肩の上四年小従一位を授け太政大臣小任のハ高野皇度ハ押勝が  
 宅へ行幸あつ遊宴と催し門年の秋三公九卿と召集て詔しハ  
 藤原不比等ハ其勲功天下小雙なり且王家の外戚なる故以て先朝小正位  
 政大臣を贈られ文忠公と謚し官位小極りぬとも猶足る所あり周の太公  
 の先蹤小準とて近江國十二郡と以て封し淡海公と謚し余官ハ故の如くとす  
 又押勝が望も小任せ武智上呂房前も太政大臣と贈りしハ時小唐  
 朝ハ賊臣安禄山謀叛を起し玄宗帝蜀の國へ落唐朝大亂し由り  
 くれ朝廷ハ御評議あり彼安禄山叛逆を討て且勝利を得ると遂ハ  
 敗績し此國の鎮西襲ひ来るすれおと其備を成めんを有るをと彼吉備  
 大臣ハ唐土より兵学陣法も學ひ得れり西戎防ぎの為太宰府へ向

られ西國の海辺に要害と構へ唐船の寄来るを防禦の備を為しられ

感夢想太后儲浴湯 改鑄新錢條

太后光明皇后天性佛道を深く信じての先帝武勳ありて諸國小寺  
院を尋ぐ建立あり又東大寺小大佛殿を造管或は施某院悲田院を建て  
普く飢人病者と恤恵を以て食とよ(業)と絶と木の功徳を積りて稍御心  
小我身許佛道不飯依深き者ありと。自負の想ひを生じのひくる小一夜乃  
御夢小殿中の空不怪れ声有て太后さめて佛法不飯依深きを鑄り慢まり  
更ふれ夫供佛施僧の業を廣大に除限有てを。萬躰の佛と造り千字  
の堂を建るとも。心不慢むる時其功徳聖粟の如く人の為不悲人である時を  
一佛と供養一僧不布施とるとも。報と得て大海の如く。但し浴室洗濯其  
功徳莫大なる更敢て余更の及とろふあも。只浴湯と殺けて慢心の垢を洗

のへと叫つるよと思召む忽ち夢覺り又。太后御身小冷汗を流しと愧恥生のひ  
此上々夢の吉不任し浴室を建て貴賤をえらぶと入湯せしめんと誓願と起  
し。都の中にて地をえら大なる浴室を造建し貴賤とも入湯を免と  
れ。昔と普く世上へ觸させのひ猶も太后御手は千人の垢を洗ひ去んと  
誓言せしめしれ。上皇王當今大效を首なり。諸卿も此義ハ余リ狂くしれ御  
更かれん思し止すありと練めたりれ。太后更承引む。妻無比乃大  
願と殺し心已不決せりと宣ひ。毎日浴室へいづるひ。貴と方賤とわ入  
湯も。程の者の垢を至尊の御手や洗ひ去りよ。入湯の諸人は余り  
心ありと辞退しれ。太后強て勸めり。御意不任せ比難有涙と  
流し。去程小日入湯と願ふ者絶間なく。己小九百九十九人の垢を洗ひせのひ  
今一人あり満願とると思召とろふ。一人の年老る法師の癩病人も汚は



浅猿あさるした女すまあま入来り入湯いりゆしるふ。全躰ぜんたい腐爛ふらんし膿血うぢちみ流ながれ其臭そのくさたし限かぎ  
 ち中ちゅうに近付ちかづかたりたれ。太后たいこうも是こは汚けがりた癩らい者しやふと忌疎きそたのいろ色いろ在あ  
 ましるが。又思おもふしのひの否いなくま妻つまが願望がんぼう是こ一人ひとりふて満みるたれ。汚けがりてても  
 何なにと忌避きひんやとて。臭穢くさいを堪忍かんにんびのひの癩らい者しやの背せと洗あらひ垢あを去さり癩らい  
 病人びやうじん太后たいこう小向せうかうひ皇后こうごう尊うやれ御身ごみと以もて。我われ們われら如ごときの悪病あくびやうの者ものふと御手ごて  
 成な正ただしのまこと難有なんいうれ我わが此こ業病ごうびやうを患うるま年とし久ひさく。百般ひやくぱん小医せうい療りやうを施せ  
 せとも更さらふ強かうたり。但ただし或ある名医なみいの中ちゆうにに人ひとが此こ惡瘡あくさう人にんの口くちにに膿血うぢちを  
 吸す出しさむ必かなくと愈よむまと得えずと教し示めしのひの世よの人にん我われを疎そて膿血うぢちを吸す  
 出し得えさせんとり者ものなり。故ゆに今日けふまで苦悩くなんを受うけたりや。ゆゆにに怖おそあるま妻つまふ  
 け。皇后こうごう大慈悲だいじひを垂たれのひの我わが瘡さうの膿血うぢちを吸す出しさむびのまと願ねがひのるま  
 ぞ。太后たいこうははあれのふの忌疎きそませのまの争まがりの汚けがりた業ごうととれと思おもひのるま

又思おもひのるま。今いまのの渠なが望のぞみの心こころ叶かなはるまの誓願せいがん満みちのるま有あるま如ごとく  
 已まで得えまのるま。其そのまの任まりの全身ぜんしんの瘡さうと吮すひ膿血うぢちを吐はりの躡たりの足あ  
 吸す出しさむひの癩らい人にんを憚おそるま色いろわのるま。其その所ところよの此こ所ところよの指さ揮きと吸すせのまの  
 噫あいの快たくの皇后こうごうの御ご恤あはれの我わが多おほ年としの病びやう瘡さうぬのまのとと怡よろこのるま。太后たいこう癩らい人にん  
 小向せうかうひの妻つま大願だいがんあのるま。你なんぢが癩瘡らいさうの汚穢くさいを厭いとむま。望のぞみのまの垢あをとり膿血うぢちを吮す  
 得えさせのまの。穴あな賢けん此こ妻つまをとり人ひと小語せうごるま。妻つまふの宣のたまひのれの癩らい人にんもも癩らい後ごの  
 大慈悲だいじひ心こころを何なにと人ひと小語せうごひのれの但ただし皇后こうごうも阿闍あせつ佛ぶつの瘡さうと吮すひの必かなくと人ひと小  
 語せうごひの勿なまの言ことも敢あてのまの大光明だいこうみょうを放はなちの今いままで癩らい人にんと見えのまの妙相めうさう  
 端たん嚴げんの金色こんじきの佛ぶつと化けれの靈光りやうかう四方しやうほうふの薰かんの。虚空こくうを臨のぞんで飛去とびさりのおの大  
 后こうごう小語せうごたのひの信しん心しんの程ほどを弑ころすま。阿闍あせつ如來にょらい不ふ癩らい人にんとあのりて  
 影降えいかうさせのひのたりの。隨喜ずいきの涙なみだと流ながりのひの大願だいがん成就じゆうじゆせのまのと御歡喜ごくわんぎ浅あるま

官中歸らるりて上皇當今も御物語ありたれども俱も御感悦在り  
 斯て浴室の地小伽藍を建立あり阿闍寺と号ひける其後太后天平宮  
 字四年六月御年六十才中明らひ則ち天和國佐保山かる聖武天皇の御  
 陵小並せて葬せたまれども且詔天平宮字四年三月詔命あつて本朝小錢と  
 以て世の交易を便むる更己小年久く公私とも益ある更是小勝る物なり  
 小近頃私の利を貪る族はる小錢を鑄り先朝の旋を犯し偽濫の錢公の錢  
 の半小過る是甚ふ曲更あれども俄小是を禁断せむ諸民強を擾るること  
 有るを改め新錢を鑄て旧錢と並通通用せむを然も民小損か  
 小益有るとして則ち鑄錢司小命令られ新錢を鑄りめひける其新錢の  
 文を萬年通寶といひ一錢旧錢の十錢小當る又銀錢の文を太平元寶と  
 いひ此一錢新銅錢の十錢小當る又金錢の文を開基勝寶といひ此一錢銀

錢の十錢小あるとなり己小新錢世小流布して通用愈自由小なり  
 民大小悦伏しる凡錢の貸する更其理甚ふ世小益あり然も是と用ふ  
 橋客の失有て錢の理小悖る時及て其身と害とる更或りて李之彦  
 が溜る更あり錢の字の旁小上小一の戈の字と著下小一の戈の字と著と  
 戈小人を殺すの器かり錢中橋と書ふ是を費し各んで遣ふを徒小積と  
 皆却て其身と害とる更或りの人を害とるとり因て錢の字小二の戈の字と  
 用おとちる且あつる其綸錢多るといふも無益の橋小費捨る時遂小  
 貪人と成て凍餒の害と免まざる溜る小善とあと思ひて用おる小用ひす貨  
 絶と布れ小吝とて貸絶まると徒小積貯て守錢の奴とたれ也盜賊是を偷奪  
 人爲小其人と害とる錢小只其宜小後て用ひれを却て身と害とる小  
 噫大なる小錢の利害ある更慎むるを恐る也



五ノ目

五ノ目



五ノ目

五ノ目



弓削道鏡乱宮中 惠見押勝滅亡之變

干時天平吉字五年都大和國保良の郷小遷され百官緒民多々新都小  
 移り住多。集上皇高野皇宮室位を太子王小繕りひひ八名平小猶朝政ハ  
 自執行ひひひ新帝の御心任せむむ。且下媼配の御行迹甚むく惠見押  
 勝と昼夜御側侍しめ撥ぶれ更限りありたりれ三公九卿も手小汗握つて  
 世と危きれ。時亦一層の憂ど増多。其故ハ丹波國の僧小道鏡とりる者あり  
 其俗姓ハ弓削氏なり。此法師身小濟世の徳也。只奸弁倍有のそして生實  
 世小稀なる大陰の者なり。ふは羊の冬大内御修法の更ありて彼道鏡も衆  
 僧小雜りて春内續經一々高野皇道鏡と入ひて御因小なり。彼法師と  
 召せと帳内入ひ一度道鏡と匡門(綉)ひひひてより。大内御意小適ひ其より  
 佛更小更上せて宮中不置置ひ暫時も御側を離れむむ。大禪師の官を

授けひ。御電愛限りあり。道鏡君の御電遇小繕りて身と孺。我意の  
 行条頗るまろりたり。當今甚むく魏くた更小思召上皇と時御辣あり。高  
 野皇露なるも用ひむむ。却て新帝と疎むひ。是より二帝の御中不和成  
 御睦。新帝ハ旧都の平城へ還幸あり。是小依て高野自手と跡  
 維憚らむ。道鏡と日夜媼樂ひひ。電愛ひひ更甚むく。世上末の者  
 まで謳歌して其風説喧らむ。流石高野皇も世人の嘲り成塞人なる  
 日六年の夏法華寺へ入せひ。御落飾遊し。法緯と法基とをヤ々。斯  
 飾を落しむむ。道鏡と媼配の御更と止むむ。且又天下の政の中小國家  
 の大事と賞罰の二ハ新帝小つせむむ。御心の伏小事ひひ。茲小惠  
 美押勝ハ是道其身入高野帝の御愛幸と蒙りて。正二位右大臣す。昇  
 進し。権威感小上越者むむ。も榮(時)れ多。小道鏡法師上皇小咫尺

ちの。昼夜玉座の側と去と阿利瘦ひ多ふ。押勝ハ君電忽ち不義御前  
 遠避られて権柄漸次減。門前車馬の音も稀く。賄賂の使者も絶  
 く。成をれ。押勝嫉妬の焰心を焦して。大に憤怒。斯てハ道鏡が推威  
 拉し。終ハ身小害と蒙る。如何も彼をせ法師と誅。高野皇を  
 箠我天下の権柄と掌を握らん。と心中巧。天平宮宇八年九月高野皇小  
 偽り奏。兵と慣。武技と筒園とを名。太政官の印を。其。以て  
 近國の軍兵を驅集り。潛謀叛を企。更と共。徒黨を。以時節を  
 と。規。小大外紀高丘比良。兼て。押勝の隱謀小荷擔。多  
 身小害の及。人更と怖。俄。愛心。押勝が逆謀の次第。遂。奏聞。多  
 小。高野皇大。驚。少。納言山村王。命。急。中宮院の鈴の印を  
 取。山村王。勅。命。奉。中宮院。純。到。鈴の印と。籍。取。出。多。押

勝斯と。ま。二男。劉儒。名。を。呼。出。急。山。村。王。を。追。麓。鈴。の。印。と。奪。取。と。命  
 我。劉。儒。九。領。堂。私。馬。小。鞭。を。あ。て。追。山。村。王。を。知。り。鈴。の。印。を。奪。取  
 我。郎。舎。と。引。返。山。村。王。印。を。奪。取。這。の。休。に。逃。歸。り。高。野。皇。小。右。の  
 次。弟。を。奏。上。皇。大。逆。蘇。存。火。急。小。坂。上。新。田。名。の。又。杜。鹿。嶋  
 足。小。命。と。劉。儒。九。を。伐。め。身。小。依。て。兩。將。官。軍。と。引。率。し。時。移。さ。劉  
 儒。九。郎。舎。押。寄。声。小。勅。詔。を。劉。儒。九。皇。居。糸。糸。と。呼。り。多。是。更  
 劉。儒。九。身。小。甲。冑。と。披。掛。馬。小。乘。牛。の。兵。と。率。て。真。先。小。馬。戎。乘。出。大  
 音。小。大。子。平。城。の。内。裡。小。在。せ。勅。命。と。六。雜。命。を。と。聖。言。り。手。勢。小。下。知。し  
 寄。兵。の。隊。小。伐。て。り。皇。孫。小。於。て。兩。軍。を。交。て。挑。戰。ひ。多。小。坂。上。新。田。九  
 拔。群。の。勇。將。を。ま。も。強。弓。の。精。兵。を。五。人。張。の。弓。小。笛。竹。の。矢。と。番。へ  
 劉。儒。九。を。ね。く。小。克。亭。で。切。て。殺。す。其。矢。過。と。劉。儒。九。胎。枝。と。替。す。と

射通しを何ぞ以て堪ふを必ち馬より落して死しう。是を以て列儒は  
軍兵も周障強が押勝が館を逃しう。押勝列儒は討まり由を安  
大系怒り將監八田部老を大将し。兵卒百五十騎を授けて法花寺の皇  
居を襲へり。八田部主命を領して即時小鎧一編し。馬も少乗軍勢と  
前後は後へて蒐出を。此更早くはえを京中の騒動以の外して上と下と  
々々。上皇斯と少食重と紀船守小百余人の禁兵を授けて敵を追拂  
る。船守奉り百余騎と卒とを向て。途中にて端なく八田部と行合  
る。船守と氣早の武士を少し。猶豫なく大音小謀逆不義乃押勝を  
佐ける。兩賊とも眼小物見んと大か抜城し。馬が進めて伐てり。八田部  
はく馬蒐出と迎合せ。兩陣火花を散して戦ひ多小。船守が武勇勝れ。八田部  
を一刀小斬り落し。残兵散く。敗走し。八田部は逃行する。斯て船守八坂小川

田名台牡鹿嶋足本と一隊ふたり。惣勢六百余騎を。押勝が館を臨んで押寄  
る。押勝ハ列儒九八田部と封せて安らぎを思ふ。不意に北段り。小路軍あれど  
所詮防戦叶はず。妻子を引果て。後より出て免道。其身の知行  
所江州をきて。落行多。是に依て徒黨の軍兵も押勝の後。成暮の行あり  
又已がさか。落行あり。官軍斯とも。と。押寄る。敵ハ早落させ  
空館かり。案ふ相違し。歸てくと。奏し。即ち押勝が官位を削  
り。藤原の姓字と除れ。其館を破却し。器財雜具までも没収せられ。噫。昨日  
までハ君電肩と雙る者なり。朝小位を進め。夕小官と増れ。今日ハ心ち忌  
悪。追捕の軍勢と。向ら。更君も臣も。反覆表裏定め。浅猿を  
一世の中よ。情ある人。眉をひそめて。嗟嘆する。斯て軍卒も押勝を。橋  
本者。專らして。磨建。殿宇を。壊ち。崩。地。猶も。押勝

を追伐しとて吉備大臣を軍師と。山智守日下部小名橋門少府佐伯伊  
 多智小千余騎を授けられぬ。西入る日頃思ふと思ふ押勝をれ。今院宣の  
 下を奉りて太子院に須波年未著られ。遺恨と暗と。此時なりと。火急出  
 陣の用意と。吉備公の下知小従軍勢を属。操ふと。路と急。田原道  
 より先廻り。勢田の橋を焼落し。屯を張て待たり。押勝も氣と奇て道急  
 だれとも。落人といひ。殊小女重と引具。れ。左右と道と。漸く小勢田ま  
 で。強者々々。早橋を切落し。向ふ岸。小千騎余の敵旗の手を翻し。兎の星  
 を輝と。雲霞の。陣を張たれ。押勝も。仰天。馬をひき。船有と。尋  
 し。れ。も。皆敵より。切流すと。覺。小舟一艘。も有され。大。小。綱。今。為。方。な。く  
 濱。つ。ひ。お。地。て。高。嶋。郡。む。ら。ま。著。前。少。領。角。定。足。宅。入。少。時。長。途。の。勞。と。ど  
 休。め。々。る。後。る。中。其。夜。怪。星。押。勝。が。目。房。の。屋。上。小。落。々。る。其。大。き。癩。の。と。し。是。を

見し者眉をひき。昔緒葛孔明の軍營小星落。程なり。孔明先亡。是  
 不吉の例なり。押勝の滅亡遠く。軍率力を落。抜く。小落行者。ま。う  
 り。斯て押勝偽て。道祖王の凡。墟。焼。王。と。新。帝。と。号。し。子。息。真。光。朝  
 搦。両。人。を。決。心。小。三。位。小。叙。其。余。の。輩。も。皆。を。れ。小。官。位。を。授。け。日。月。の。旗  
 を。造。り。て。押。主。二。千。余。騎。を。三。隊。小。分。高。嶋。の。西。の。山。を。後。小。あ。て。陣。を。張。り  
 宜。軍。の。二。將。物。部。廣。成。小。山。添。陸。より。押。寄。目。下。部。佐。伯。兩。將。兵。船。小。步  
 乘。て。湖。水。の。面。小。漕。並。々。去。程。小。押。勝。が。勢。廣。成。が。兵。の。押。寄。る。分。得。て。少  
 時。矢。軍。し。頓。て。兩。陣。も。物。と。つ。入。乱。追。つ。及。て。半。時。た。り。攻。戦。ひ。の。勝  
 敗。と。も。さ。る。所。小。廣。成。が。吉。備。大。臣。の。謀。計。を。受。て。兼。て。後。方。の。山。寄。の。樹。林。小。軍  
 兵。を。伏。せ。れ。り。今。戦。ひ。の。決。合。と。て。時。分。と。相。圖。の。旗。と。揮。々。る。中。を。伏  
 兵。二。は。小。起。り。近。辺。の。在。家。小。火。を。り。喊。を。發。て。敵。の。後。より。奮。地。暗。小。伐。り

押勝が勢思ひかけあはれ伏兵小撃多し。前後の敵あまらざる散  
 小乱是も廣成得ずと緒勢を励。自身真先小馬成進也。縦横无碍小  
 斬多し。緒卒由主将小あまらざる勇を奮ふて捲り多し。押勝が陣  
 いよいよ浮足ふかり。進退途を失ひ濱手敗走と船小し。乗舟有山路を  
 落るも有押勝も敗る味方小誘れ。濱辺に馳行兵船小乗浅井郡塩  
 津とさして漕せざる小あまらざる悪風吹起り。逆浪船を覆さんとする小水主  
 楫取大系發丸。船艦小地廻り身とあまらざる進んとこれ。逆風小吹成れ  
 て高嶋郡三尾崎へと吹着られ。是も依て押勝力なく陸へ上り。隊とさる  
 ところ小佐伯早部物部三野大野植本木の官軍。各兵卒と率て押奇喊と  
 發て。公方より撃てくる小。押勝陣頭小馬を立新帝の唇貫あると。足も  
 引を敵と追捲り。御感預し。下知をうと。これ。緒卒是も

励まされ。鎧の袖を拘合。衆の勢を傾けて一死族となり。斬も射れも物もせと  
 換斗んで批と戦う。官軍多勢あるも死憤の戦も斬多し。支度路も成  
 て。ええ。真先勇んで。浪波や敵も浮足成。進も伐やと下知する時。も  
 藤原藏下。名新兵と率て近來り。敵の横合より會釈も斬り。勢も  
 猛く攻まされ。ええ。小勢と。戦ひ。波も。押勝が勢。又散。小撃多し。れ。敗走  
 と。押勝父子大いあせり。穢れ者の逃足。踏留て斬撃。鞍坪。下知と  
 是も。耳中。散を。官軍。追。追結。或討取。或生捕。湖上  
 押勝父子。拒敵。方と撃破り。又船小し。乗舟。何國を當と。湖上  
 と。落行。官軍。道。船。陸。追。遂。押勝。船。前後左  
 右。圍。寧結。矢。射。症。敵。率。是。夫。先。残。り。少  
 小射。落。押勝。夫。三。筋。射。付。石。村。石。楯。と。者。船。



躍て敵船へ飛乗押勝おむつと組押勝心得ると少時ハ操合々多う。矢張り弱りと  
ひらむとら石楠遂小組伏て首と極る。此内小官兵追へ船と漕寄敵乃  
船小乗移りも取高名を頭へたり押勝が男真光朝搦も。今、是までなりと  
刺ちて湖水へ飛と矢も多う。後ハ手小敵もかうを官軍皆陸へ  
上り所へ逃隠る押勝が事子後類と搜へ出と生捕と二十余人塩焼王を  
も虜おとさる多う。是依て諸將凱歌と三度揚て都へ凱陣へ上皇勝軍と  
奏へられた。大内邸感賞ありて諸將忠賞を給り。別と此度の勝利ハ吉備大  
臣の軍略お依りて。官一階を進り加増の領地を給り多う。諸生捕の者公衆と珠  
せられ塩焼王も押勝が逆謀小目意あり。糾免さるはく珠せれる。押勝  
首ハ大路を引渡して鼻木小肆。其三族と尋搜へ皆断罪お行れ多う。押勝  
が第六男小刷雄と僧あり。是、疾より佛道へ入へて先服を著り隱岐乃

國流罪お行れぬ。其後先年押勝が逆謀奏依て。筑紫系流罪おせれる。右大  
臣豊成を徵還され流刑の勅書と焼捨田の官位お復され多う。范子言る吏有  
人富とも貧を忘さざる時ハ餘其富と保つ貴れも賤を忘れる時ハ其  
貴を保つと宜ある多う。押勝が如きハ莫大の威福を極めか。猶其富貴を足か  
とせむ。橋奢と恣り。君臣の礼と亂し。刺へ一時の妬心より。まも厚れ君恩とせ押  
して謀叛を企て遂小身首所を異れ。三族と滅せらる。小至る吏是富て貧と  
忘さる貴して貧と忘る者。細つる。是小就ても道鏡が卑賤の身を以て君  
富小辨と尊大の行々も其も行末如何有れと諸人潜小耳語合々り  
新帝淡路於福所崩 神靈路上救危難忠臣吏  
逆臣押勝已小殊小伏し其類もて刑不行れ。後當今大王も押勝が婿むと  
在せむ。叛逆小目意ありと疑ひ。兵部卿和氣王左兵衛督山村王外衛

の大將百濟王敬福亦小宦兵數百人を授けられ平城の旧都なる中宮院に  
 かけられ俄の妻なれを新帝大系脚蹠をあらう。衣冠を整へて脚蹠も  
 かく侍衛の宦人も周障惑ひて逃失脚側を従ひざる者もたし和氣王山村  
 王詔命を噴て新帝の罪を糾。帝位を刷て大炊親王を淡路國に送  
 進せざる。即ち異の馬に乗せりて右衛督藤原藏下名奉行に配所送  
 り進らせ淡路の高嶋に幽るる殿造りて押籠なりたる素り脚側小車  
 なる女房もち近臣も侍も昨日の金殿玉樓の引替て軒も間租の板屋  
 漏る。沖津波風脚身小ま。夜もささる啼る。子鳥鷗の声小昔と去り脚  
 夢も結むせむ。昼夜脚涙小袖を絞むる末就て。押勝が隠謀ハ露る。自  
 知む。脚も脚身小僻変在まぬ。斯浅猿丸嶋守せられ。妻の朽惜さよと  
 うもく憤らせぬ。あれ心まる者ぞと。此尉憤を暗さると思石室竊る配

所を抜出の志と方へ剽行ゆひる小佐伯宿務高屋連早も是を安知て  
 大系蹠死兵士を率て追蒐なる。東西南北を尋搜して遂小再び擒小進させ  
 ちも配所押籠なる。緊く番兵と付置る。翌日配所小て薨逝ゆひり  
 り。実之上皇の命小依て竊る糸。なりたりと。脚年三十三支脚在位僅  
 小六年。年号ハ先帝辯の天平宝字と用ひられ別小年号と多し。脚位を廢  
 淡路に流罪ゆひり。成以て淡路の廢帝とハヤわり。無実の虚名を蒙り  
 浅猿く配所小て崩ゆひる痛々る。保良の都ハ小新帝と廢  
 ゆひり。高野皇重ね。宝祚を踐ゆひり。是を禰徳天皇とヤなり。年号と天  
 平神護と改元あり。是皇極存明一帝小て在せども。二の称号ある。例小依  
 る。と。天皇再び九五の位を踐ゆひり。倍道鏡法師脚愛幸あり。太上  
 大臣大禪師の高宦と授けゆひり。三公九卿の上小まられ。道鏡大系驕慢り

心增長大臣をこる吏士の己を縛ふ者ハ功多れも官位を進る己ハ阿  
 らざる者ハ罪なれも官と損し禄を減しけるも百官疫神のこく恐まて心  
 中の忌悪ども表ハ皆尊敬して遠くおひる天皇す道鏡小法白の尊  
 号と賜りるれ道鏡弥君電小袴リ錦綉小纏れ八珍小飽奢程とと  
 極る吏もた猶も足吏とを何率王位小昇り天下と掌握して先祖と  
 耀り子孫と賑さん及びあれ望み成幾い多と不敵なる此時右大臣豊  
 成押勝が凡なれとと右大臣と止れ下道吉備と左大臣と藤原永手を  
 右大臣とせられ多誠吉備大臣ハ文道武道小達唐王も博文の答と揚  
 一名臣なれも孝練天皇の侍續となり太宰府小學校と殺し由此人の功  
 始賤宦の身なりも追小位階を進る遂小三台の高宦小登庸せられ朝  
 廷の朝政と佐る身となれも未例なれ身なり多る賢臣あれ道鏡

が君の威光を甲小彼大臣と直下王莽董卓が莫公逆の色と合と量  
 知とれども時の勢の制も吏能も詳とよふと其成行果た規  
 くれ多天平神護元年三月越智泰澄寂と越前の白山が閑た名僧  
 たり年勝道と僧下野國二荒山を閑今日光中と稱し又和歌小  
 黒髪山とより日二年大学助教膳臣大丘奏聞する唐主の帝王を孔  
 子と崇めて文宣王と謚し又願小皇國も其例小任せ孔子と文宣王  
 と稱し度り願ひを即ち勅許あり多是より倭國小孔子と文宣王  
 宣王と稱り日三年正月天皇道鏡を愛し重小西宮の前殿小住  
 しれ百官小拜賀せられ多る道鏡権威偏小帝王の満朝り  
 群臣凜と恐る吏乳虎のく其崇と受と皆阿り使ひ拜趨して媚とけり  
 たり慈小太宰府の神宦阿曾六呂とりの者道鏡の意小脇んと飽と媚結

ひと言さる、其宇佐八幡の託宣を蒙り、其神託のちもむれ、今道鏡法皇の  
 王位を禪りむ、天下泰平、わて國大の豊饒なる、御告ふいと、真しく、  
 奏状を書て捧げ、道鏡大の悦び、即時小天皇、奏状のちもむれを執奏  
 一阿曾、小宮小妻の金銀絹帛とぞ与へ、天皇、道鏡を愛し、小妻最と  
 甚と、とのとも、王位の更、容易ぬ、天下の二大吏、阿曾、奏状のちも  
 以、御讓位、あ、ん更も成、今、應、宇佐、勅使を、上、愈、神託相違、あ、  
 於、天津、日嗣を、讓、と、勅、詔、な、の、ふ、と、道鏡も、理、小、伏、し、さ、も、宇佐、  
 勅使と、ま、神慮と、伺、せ、ま、と、中、より、天皇、右、大臣、吉備と、召、す、宇佐、勅使、  
 主、命、臣、下、と、擇、む、命、と、命、の、吉備、公、勅、命、と、奉、り、退、て、思、れ、る、公、  
 の、勅使、然、朝、家の、二、大、吏、な、れ、る、普通、の、者、遣、し、て、智、勇、と、兼、備、と、る、大  
 忠、臣、あ、ら、む、ん、を、大、吏、と、過、る、命、と、心、を、困、め、群、臣、の、中、と、維、彼、と、勘、考、ら、む、小

和氣清元名こそ、智勇兼備し、正直廉貞の忠臣なれ、此度の勅使、清元、  
 如者、右、命、と、と、上、と、定め、其、由、と、天皇、奏、し、や、れ、れ、即、ち、清、元、名、を、召  
 出、され、勅、詔、有、々、も、大、宰、府、の、阿、曾、丸、不、思、議、の、神、託、を、蒙、り、さ、ら、れ、も  
 王位を禪る、更、ハ、吾、國、の、二、大、吏、あ、れ、む、阿、曾、丸、が、表、書、の、も、も、定、め、さ、る、神  
 託を疑、ま、似、れ、も、你、筑、紫、下、向、宇、佐、八、幡、宮、お、奉、幣、て、今、應、神  
 託を伺、の、歸、る、命、と、なり、清、元、敬、ん、で、勅、命、と、奉、り、君、前、と、退、れ、私、宅、へ、歸、ら、  
 日、其、夜、道、鏡、清、元、を、西、殿、招、れ、旅、行、の、餞、別、と、号、し、山、海、の、珍、味、と、細、く、重  
 く、御、食、應、し、其、上、數、多、の、珍、器、重、密、金、銀、亦、と、引、出、物、と、備、左、右、の、女、房、と、并  
 ひ、清、元、と、近、く、招、れ、御、邊、此、度、宇、佐、の、奉、幣、使、小、吏、も、更、ハ、我、ハ、王、位、と、讓、る、一  
 不、也、我、八、幡、宮、小、伺、さ、る、所、なり、其、心、得、と、以、て、宜、く、神、託、の、ち、も、む、れ、を、回、奏  
 せん、我、帝、位、小、即、ち、御、邊、を、太、政、大、臣、小、執、領、國、ハ、其、望、小、任、と、さ、る、又、其、

心得違を奏し、あも密三族と夷を、天下の政道を掌小握り。門の敏余曰子孫の官貴と針も。九族の滅亡と招有只脚辺か一言の中あり。依てあも分別と出させれよ。或嫌、或劫と討の迷とけえ。清丸は解と承伏せ、体となて暇を。松宅へ入り、後道鏡より得る金銀重器と唐櫃小納り、堅く封印を付、諸旅装と敷正、日勢と従へ、都と啓行し、清丸が真逆の朋友、真人豊永とく者、清丸を見送りて、途中小別の酒と酌る。借宿する、武王無道の紂王を伐て天下と保り、伯夷兄弟八是を愧く、義周の粟と食ふと。遂小首陽小餓死せしと、今況や神國の粟と食者、彼姪僧天位と犯さむ。大丈夫者何の面目有て、其下風小至、其時ハ我今の伯夷と、足下の意ハ奈何と言ふ、清丸微笑して天を指し、皇天明て日月未ど地小落ぬと。豈上慮る、更の狡まと言ふ、豊永大い小始、我足

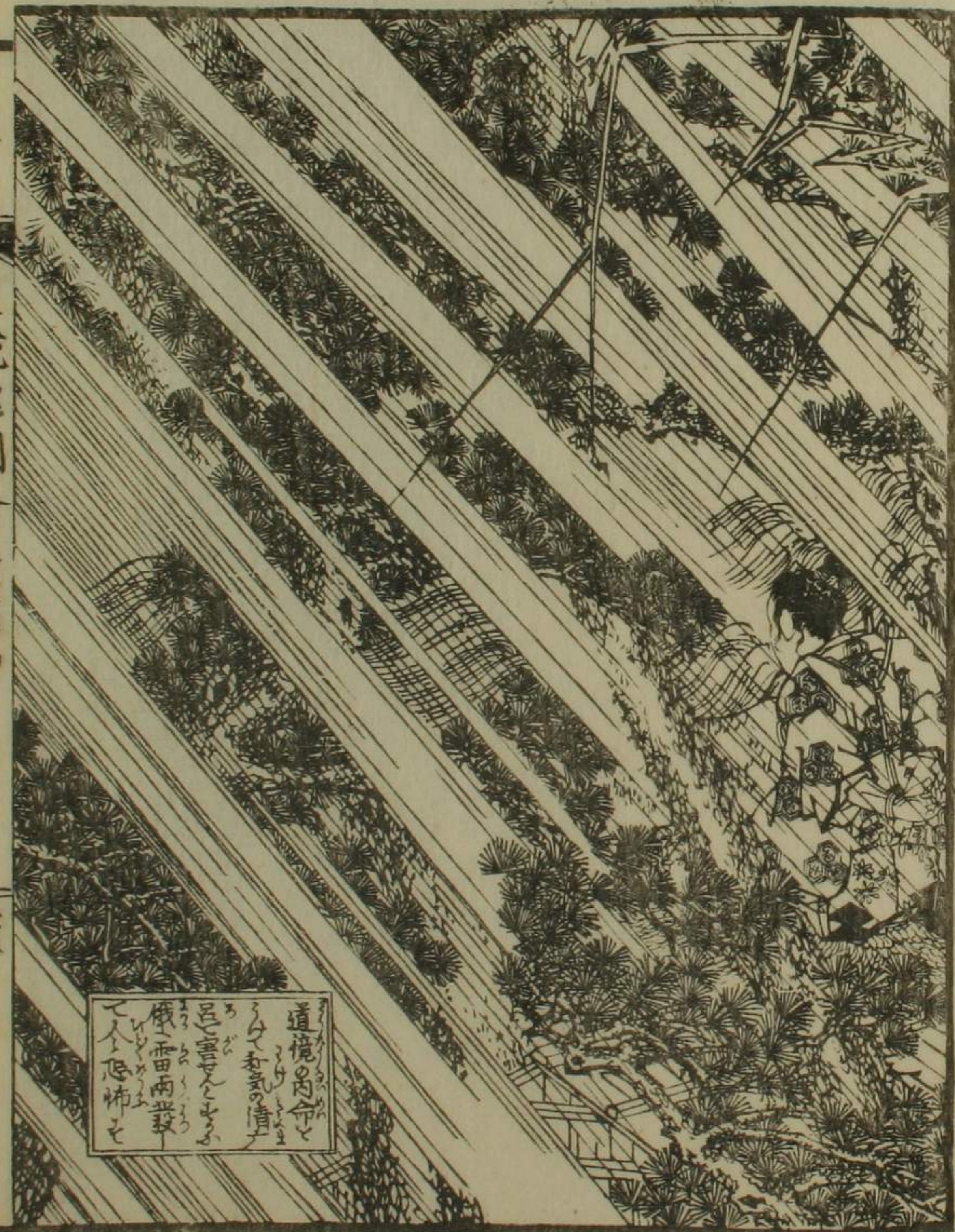
下小及ぶる、更遠とて。拜謝とて、別送る。清丸を、道次急た、紫下、宇佐の神官の館小着、一七日、向沐浴齋戒して、心神を淨め、社檀、幣帛と奉り、徐小宣命と讀上、依頭平身と祈念、今般乃奉幣、天下の二大吏、俯て願、正幡宮の奇瑞を著、神託を示し、丹絨を凝して、祈り、八幡宮も、清丸が忠誠を感納、存久、忽ち神殿鳴動、社檀の扉、おのづから開れ、錦の御帳垂る、内陣より、金光輝たて、其光朝日の影、彷彿り、清丸此瑞現を拜見と信心、肝小銘、猶も拜伏して、御託宣を待する、内八幡宮巫女、乘移り、あも覺り、十三件ある、巫女俄小身を戦と突上り、其音、声、愕り、凡吾皇國の天津日嗣ハ神代の昔より、神孫小傳ると、皇統の君、其行ハ天照白太神の神慮小適、時ハ王位を踐り、更、賢良、臣下の身を以て、帝祚を嗣、人更思ひ、増て、況や無道、姪、醜の妖僧、至

尊の密位を望むるや故小神靈怒りて其祈を散む。你早く帰洛して神託の旨  
 成偽り飾らむ。右の侍小奏せよと。嚴重告めひく。巫女六噓と侍人更を覚  
 める体なり。清丸著明なる神勅を奉りて感涙小狩衣の袖を絞り。誓首再拜  
 して畏り成りよる内巫女よ。正氣及々清丸八幡然として社壇を下り。神宮の館  
 へ歸るといひく。願小旅装と敷正へ。おま道路を急だく。歸京。私宅へ歸らむ  
 旅装のまゝ。参内し。これを執奏の官人斯と奏聞。や。多不依。天皇高座小出脚  
 かり。是より公卿の面々相結て列座。清丸が回奏如何と。皆斤漣と吞耳を  
 澄して。聞居る。道鏡。清丸が飯浴せと。より。浪波我望と。達する時。節至未  
 せり。渠小まの引出物をと。色高宜と授く。由中せせ。れを。必定我。練位有  
 る。との神託なりと。奏聞と。巻と。空頼。錦綉羅綾の装束。刷ひ。金造の長衣。不  
 刀と帯及。昇殿して。御簾の左。小七室と。鏤め。侍子と。まさせ。堂と。腰掛。掛く

清丸が回奏遅りと待小る。時小清丸玉座小向。拜を。さ。首と。擡。色。成。平。と。奏  
 する。臣勅詔を奉りて。字佐八幡宮奉幣仕り。神託を伺ひ。し。り。と。忽ち。社  
 壇鳴動。扉あつ。開け。内陣より。金光輝れ。と。等。く。神靈巫女。小。移。す。て。託  
 する。小。凡。吾。皇。國。の。天津。日。嗣。八。神。代。の。昔。より。皇。孫。小。傳。来。り。た。ひ。皇。統。乃。君  
 たり。と。其。行。ひ。天。照。白。太。神。の。神。慮。小。適。ひ。ま。なる。時。ハ。帝。作。を。嗣。り。更。然。す。又  
 賢良なりとも。臣下の身として。王位を犯さ。更思ひ。よ。む。と。増。て。況。や。無。道。媼。配。乃。者  
 小。於。老。故。小。神。靈。怒。り。て。其。祈。を。散。む。と。此。昔。歸。洛。して。右。の。侍。小。奏。聞。せ。よ。と。告。む  
 ひ。く。神。ハ。と。せ。め。ひ。い。と。言。半。句。の。泣。む。か。り。少。も。憚。る。色。なく。奏。聞。し。る。小。と。天。機。甚  
 ぶ。穩。う。あ。ら。む。何。更。も。宜。む。と。御。簾。然。ら。と。下。と。帳。内。小。入。脚。なり。多。満。座。の。公。卿。身  
 小。冷。汗。を。流。し。互。小。面。を。見。合。て。默。然。と。是。小。依。て。堂。上。堂。下。鳴。と。鎮。て。音。も。せ。と  
 道。鏡。ハ。大。小。怒。つ。く。眼。血。を。と。面。色。赤。く。なり。又。音。を。な。り。太。刀。の。柄。を。確。る。許。り。小。握

齒を切り炎のてん溜息と吻と吐清丸の面を嚙と睨と。われ偽奴先小太宰府乃  
 阿曾丸小正神託有る小。今又うも不肖の託宣有るや。是已が作殺け偽乃  
 七女言小て信むる小足む。勅命小背とて以我を無道媼西と罵る余。奇怪の白癡  
 くの見よ。己が五臓を劈た九族まで刑罰せむ。逆と躍上つて散く小罵り。席を  
 蹴立て真殿へ立入天白小動して。急だ清丸正夫を牛裂け。妻子後類と市小  
 曳出とて刑戮しめと奏すれども。天皇逆鱗強く在せども。流石宇佐八幡の神慮の  
 程を恐りひ死罪を免。遠嶋へ流罪小行む。勅命小背とて以我を無道媼西と罵る余。奇怪の白癡  
 飽足されども力なく不肖く小承紹。怒氣止まれ清丸を穢名と改各させ  
 左右の脚の筋を断しめ壁と。大隅の海濱へ流しと命。張典小乗て都へ出  
 竊小警言固の武士小命と。路次小刺殺とせたり。下知り多。是小依て武士とも  
 清丸の牽輿を下吏小昇せて津の國芥河までい。此所小矢ひてんと輿と昇居

せ々る小俄小二天を曇り。暴風吹大雨降出。雷電鳴閃きて。今も頭上落るる  
 危勢ひかれ武士も戦慄して刃も拔得ず。免首小成て瘞るる所。真小豊永  
 飛馬小鞭を加へ。蒐来り小京。体們清丸を過ちなく守護と配所へ送まよ  
 途中小害言小罪三族と夷ぐ。右大臣殿の告状是小わと叫り。告  
 文然り出と續中せられ。武士も大に恐る。命令と背く。由中害心を止め  
 々る小不測や。忽雷鳴止雨漸く。あがりたる。真小豊永輿の内。清丸小對面  
 一。足下朝家の為小其身を忘る。妖僧の逆威と恐む。直言とて神託を奏。皇  
 統を紊れむとむる。変誠小朝廷の太心臣と縋つ。然小君道鏡小魂を奪れ  
 るひ。足下と遠嶋配流。小更難。小余あれ。時の不肖小奈何も。まじ。さもれ  
 皇天足下の誠忠と照覧。小思免の脚沙汰ある。皆時の艱苦と堪忍  
 ひて。飯浴の期を待ひて。練められ。清丸も豊永も厚志を感謝。互小再會と約





袂を分ちて豊永八都を引返す。斯く清九危難を免きて張典小中配所  
乃大偶、赴れ多路、路次を宇佐八幡(参詣)。一夜参籠して朝廷の安寧を祈  
且我身の飯洛を願ひ多奇ある。何方よりともあつて三尺許の小蛇出末り  
て清九が断とす。兩脚の痲を一向の膏を塗る。兩所の金瘡一夜の内小瘡て行歩  
旧の如く自由なり。不思議なる清九奇異の思を。是余八幡宮乃神  
助小依と云なり。感涙を流し。神於献し祝詞を上げて神恩を謝し。宇佐と  
云く。遂に大偶の配所を看小る。茲に朝臣藤原百川、清九が忠節を深く  
感し、其身の所領備後國小有れ。其半を令て清九の配所(贈り)多小。清  
九配所不請居と云く。衣食も不足て萬不自由なく。安んじて日月を送る。

光仁天皇御即位

道鏡於配所餓死條

神護景雲四年庚戌三月、称徳大皇河内國由義の宮(御幸)乃ひ多。道鏡

如何なる所存や有え異れ。食物を長壽の御茶なりとて天皇進めたり。小  
君、御電愛深。道鏡が献する食物の聊も疑ひを。快け小食い。ひ多小  
とれ。何となく玉體悩く。あせのひ都。還御在りても朝政を聽か。更むけ  
御怒次弟、重らせのひれ。医宦の面く種く良方考て御茶と献さ。敢  
て其驗なく。近侍の女官も近付む。只三位吉備の由利と。臣の奏をき  
更あれ。御病林(参り)て更茂奏する。道鏡ハ昼夜天皇の御側在り。倍我  
意を震ひ多。諸卿薄氷と踏て。恐を危ぶ。其年の八月小天皇、崩  
崩御なり。ひね齒五十三才。前後世と知ると十六年。尊嚴と大和國添下  
郡佐賀御高野の山陵小葬り。時小皇太子い。定たり。おれ。左大  
臣藤原永手。右大臣吉備緒卿と集。何きの皇子。帝位小即す。べと  
評議ある。衆議區りて更。決せ。此小藤原百川藤原良経と心を

合。天智帝の御孫白壁王とて聖明の君なり彼皇子小室位は継せんと  
 頻て言えん。永手吉備の両公実もとて遂小室位王と十善の帝位小即奉  
 つりたり。是君を四十九代先仁天皇と申なる。御父天智天皇の皇子施基皇  
 子御母紀稼姫とて贈太政大臣諸人の御女なり。年号と室龜元年と改元  
 し。備先仁天皇朝政を聽り。始。坂上野田九兼て。道鏡が君。道鏡  
 甲。被。我。意。の。行。条。を。深。く。憤。り。な。れ。其。罪。と。給。へ。る。ふ。り。帝。も。道。鏡  
 が。奸。悪。を。兼。て。思。ひ。せ。り。由。へ。死。刑。申。し。思。召。ん。も。先。帝。の。御。意。愛。深。く  
 一。者。あ。れ。た。陵。の。土。い。ま。新。あ。る。小。刑。戮。お。行。い。も。御。意。の。憐。り。有。と。と。死。罪  
 一。等。と。省。し。下。野。國。流。し。茶。師。寺。の。別。當。と。せ。れ。其。舍。弟。弓。削。淨。人。と。土。佐  
 國。鏡。の。道。鏡。先。帝。の。陵。の。側。に。居。を。構。て。栖。り。と。藤。原。楓。九。勅。命。と  
 奉。り。て。弛。向。ひ。宣。命。と。續。せ。道。鏡。が。身。小。纏。し。羅。綾。の。衣。服。を。荒。け。あ。く

刷。り。木。綿。の。衣。服。太。布。の。墨。の。衣。と。着。せ。お。申。の。張。典。承。て。緊。く。敬。言。固。の。武。士  
 小。守。を。配。所。に。送。り。々。々。噫。淺。猿。た。く。先。帝。御。在。位。の。内。権。勢。肩。を。並。ぶ  
 者。も。た。く。橋。本。王。候。小。擬。群。臣。の。上。小。跋。扈。て。猛。虎。の。羊。群。小。在。が。如。あ。り  
 も。忽。ち。一。個。の。罪。囚。と。成。て。回。被。死。牢。典。小。承。承。ら。ま。二。人。の。従。者。わ。た。さ。ま。が。う  
 飢。る。大。の。飯。袋。さ。ら。ふ。比。ね。を。緒。人。指。唾。吐。し。て。惡。く。笑。り。ぬ。者。も。わ。ら。う。多。う。斯  
 く。下。野。國。茶。師。寺。も。著。し。く。板。間。お。ま。の。飯。屋。押。筆。監。率。と。付。て。嚴。く  
 守。せ。楓。九。都。へ。歸。り。々。々。是。より。道。鏡。ハ。別。當。と。し。ハ。飯。の。名。の。朝。夕。些。少  
 の。麴。食。を。食。む。う。り。か。湯。水。で。小。思。ひ。終。小。飲。更。能。い。と。さ。も。花。麴。と。尽。せ  
 一。金。屋。王。殿。小。錦。綉。の。褥。と。致。け。敷。多。の。女。官。小。傳。と。八。珍。の。膏。味。小。飽。一。茶。花  
 今。ハ。盧。生。が。夢。と。覺。て。昔。と。忍。今。と。恨。々。々。天。四。射。の。程。を。哀。れ。り。々。々。る。る。身  
 身。と。わ。く。も。猶。露。の。命。と。捨。り。得。や。と。九。夏。の。暑。日。も。涼。風。と。迎。り。便。も。わ。く。と。ん

冬の寒く夜も炉火を求る吏能む。凍餒辛苦する吏三年ありて。終つて屋乃  
 裡小餓死し。却統都六光仁天皇政を聽む。吏正しく道鏡兄弟を  
 摘罪し。其縁類をもれく小刑し。小就ても和氣清丸が直言の忠節と磨  
 感ありて。大隅の配所より徵還され正三位大納言お仕り。重く賞禄と給り  
 其誠忠茂頭し。ひえを清九愁眉と用た。大不欣悦して。皇太子と畏り  
 茲小光仁帝の御后井上皇后と。中八帝い。皇太子おて在せ。時井上内親王と。ヤ  
 君の御電愛深く他戸皇子降誕し。ひし君御晩年。空お天位小即せ。ひて  
 井上内親王と。皇太子と。太子小まひ。ひる。出る小。白皇后帝の御電愛  
 漸く小薄き。夜の御幸枯く。かたせのひれを貴も賤も嫉妬ハ婦人のあひ。ひ  
 皇太子と。枕の塵乃積る恨小。妬心を生ず。ひ帝と御中睦く。く。遂小大悪心  
 と起し。ひ。宝龜三年夏の頃。洛中洛外の神社佛閣。咒咀の願文を捧て。帝と

調伏し。早く崩脚をせ。太子他戸皇子と。帝位小即せ。せんと巧む。ひ  
 多ると。心ち。其義深く。穩密お。ひ。悪吏千里と走る。ひ。遂お其  
 変を参議藤原百川。出で。大不欣悦。神社佛閣。捧げ。ひ。咒咀の願文  
 を取集め。帝。奏聞。ひ。天皇大い。逆鱗在。皇后。ひ。他戸太子と  
 押菴。ひ。已。死罪。行。勅。左大臣永手。右大臣吉備。下  
 の緒大臣。百般陳。ひ。漸く。死罪。一等。恩免。皇太子。其  
 位。廢。庶人。な。斯。儲君。を。同。年。八月。帝。群臣。を。徵  
 集。ひ。何。皇子。皇太子。小。勅。向。皇太子。酒。人。内  
 親王。春。宮。小。ま。り。た。睿。慮。中。在。其。其。宣。群。臣。の。議。す  
 る。こ。つ。汝。居。小。百。官。座。を。列。互。其。見。合。せ。言。發  
 する。人。小。藤。原。百。川。位。進。出。て。奏。山。部。皇。子。弟。の。皇

子とや。殊小賢徳す。まこと更緒人の知とらなる況や。嫡を立庶とさす。わは和漢古  
 今とも通義あれ。彼皇子と太子。ふまの久を理の當出。てい。や。と。す。藤  
 原濱成進。出。不。山部皇子。脚母の素姓卑。る。春宮。ふ。ま。入。更。如。荷  
 あ。ん。弟。二。の。皇。子。稗。田。皇。子。と。太。子。小。ま。の。ふ。あ。と。奏。る。皇。子。の。緒。卿。と。の。具。六  
 負の皇子。方と。勸めて。評議。更。小。決。せ。と。百。川。眼。と。怒。一。菌。を。切。て。曰。太。子。と。ま。ゆ。ふ  
 更。を。徳。と。給。て。母。の。貴。賤。を。給。せ。と。も。り。腹。ハ。仮。物。な。り。古。の。大。舜。禹。王。を。皆  
 賤。れ。人。か。れ。も。唐。堯。虞。舜。其。賤。れ。を。給。せ。と。其。徳。を。好。て。天。下。と。禪。ま。う。几。一  
 天。の。君。の。世。嗣。を。定。む。六。天。下。万。民。の。為。お。て。思。愛。私。の。為。お。む。と。仮。令。脚。母。乃。素。姓  
 貴。と。い。さ。も。其。徳。薄。く。天。下。の。人。民。依。從。と。ん。誰。と。俱。お。う。天。下。と。保。ら。ぬ。ふ。死  
 脚。母。賤。く。も。脚。身。小。賢。徳。在。て。天。下。の。人。民。懷。れ。從。ふ。四。海。太。平。中。て。宮。祚。長。久。成  
 ず。山。部。皇。子。八。脚。嫡。子。と。や。聰。明。膺。智。小。在。せ。む。天。下。万。民。悅。伏。と。ん。何。と。脚

母の素姓小拘らんや。と言。暴。多。む。其。理。小。伏。と。も。今。有。も。左。右。異。論。區。む。一。決  
 せ。され。も。君。も。脚。退。屈。在。り。其。日。の。評。議。ハ。止。り。て。入。脚。カ。の。い。ま。れ。を。緒。卿。も。皆。退  
 出。せ。れ。る。も。百。川。入。を。敢。て。座。を。起。む。或。人。不。審。何。也。小。退。出。せ。れ。る。や。向。か  
 百。川。を。屬。一。と。太子。の。評。議。ハ。天。下。の。大。事。な。り。山。部。皇。子。と。太。子。小。ま。の。一。道。ハ。我  
 此。殿。中。と。固。く。退。く。仮。令。不。敬。の。罪。と。唱。ら。れ。百。川。が。一。命。と。徴。る。と。も。國。の。為。小。捨。命  
 露。れ。も。惜。む。と。と。て。一。す。も。動。と。是。小。依。て。其。向。も。人。も。為。方。か。く。捨。置。て。退。散。一  
 々。り。是。下。り。度。く。も。太子。の。脚。評。議。有。る。れ。も。猶。決。せ。と。百。川。を。始。の。て。山。部。皇。子。と  
 勸。め。て。止。む。殿。中。小。有。と。四十。余。日。其。間。晝。夜。少。も。睡。眠。せ。ず。東。帶。せ。一。夜。凍。死。と  
 て。座。了。れ。た。帝。も。其。志。の。金。鉄。の。て。く。妻。せ。る。感。を。お。ひ。て。遂。小。山。部。皇。子。ハ。主  
 太子。の。宣。旨。と。下。し。の。ひ。り。後。小。桓。武。天。皇。と。ハ。此。皇。子。か。り。噫。忠。か。る。る。の。百。川。國。家。の  
 為。小。死。を。恐。む。と。官。祿。と。人。も。吏。履。の。て。く。強。練。の。忠。節。和。漢。と。も。い。ま。と。例。を。聞。む。と

後代臣下する者の龜鑑と習つべし。桓武天皇のよき天下と治めゆいも皆百川が依り  
 練めたるの依り此百川といふは參議正三位藤原宇合卿弟八男中幼稚の時よ  
 器量衆人か勝る。桓德光仁一帝の事參議中衛大將從三位の官位を歷  
 内外の政を補むるといふ事。密龜十年七月春秋といふ平八才出で卒去せり  
 光仁帝甚く悼惜せり。從一位の贈官あり。是は且つ彼井上皇后他  
 戸皇子八位と損され庶人と追下られし。無念の月日を送り遂に憤死せり  
 其悪逆種々の祟となり。叡山の最澄傳教大相武天皇の孫  
 一社の神小鎮をりて。其怨靈の憤り成る者なり。今の御靈八社の内の一社は之  
 因は云山城國高雄山神護寺にえま和氣氏造立の寺院あり。和氣社と云ふ清徳卿  
 朝延より勅使下向あり。正一位と贈りて。獲天賜神を神と下賜りて。實は守御事と云ふ  
 扶桑皇統記前篇卷之四畢  
 貫城忠の永輝きりて也

名古屋  
 大曾根  
 矢野平兵衛藏版之内繪本書目

繪本中山草紙	一冊	<small>秋葉 屢聚寺</small>	一九の紀行	二冊	繪本草紙大全	一冊
繪本景清草紙	一冊		佐倉宗五郎實説	一冊	道歌百人一首	一冊
繪本對權草紙	一冊		梅川忠兵衛實説	一冊	繪本手遊	十冊
繪本尾梅 三郎草紙	一冊		交保彦左衛門實説	一冊	繪本あそび	一冊
冬楓の夕栄	三冊		宇都宮鈞天弁實説	一冊	繪入都々逸	五冊
近世七小町	三冊		伊賀越仇討實説	一冊	繪本庭訓往來	一冊
明治天一坊	二冊		萬	一冊	柳川畫譜	三冊
繪本西郷一代記	二冊		繪本桃太郎代記	一冊	花鳥畫譜	一冊
名古屋七變人 刻	幕		繪本厂金文七	一冊	繪本太閤記	十冊

